語ることの出来ない剣士

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
語ることの出来ない剣士

【Ｎコード】
Ｎ９５３５Ｚ

【作者名】
学校嫌い

【あらすじ】
突如として起こった魔物の暴走。それにより勃発した＜終焉戦争＞は、一人の少年から一度全てを奪った。十年後、成長した少年は＜力＞を携え故郷を後にする。＜スレイジア王国王女・キャロル＝ド＝スレイジア＞＜虐められる事に快感を感じる少女・メルシア＞。道中出会った二人の少女と共に、ムラクモは＜ガルシデア＞を巡る旅を始める。※基本緩く行きます

第一話・幕開け

その日、数人の子供がここ＜ハイス村＞近辺の草原で遊んでいた。その中の黒髪の少年。名は「ムラクモ・ナイレット」と言う六歳の少年。

ムラクモは誰にでも分け隔て無く接し常に明るいことから、老若男女問わず人気がある。そんなムラクモを両親である「アドルフ」と「ルミナ」も誇りに思っている。

「じゃあ、また明日！」
「おお！　明日は勝つからな！」
「ぼくだって！　明日も勝つよ！」

ハイス村は取り立てて何かがあるという訳では無いが、毎日子どもたちが元気に遊んでいる。村の大人達はそれだけで十分だと思っている。

今日もムラクモは友達と追いかけっこや隠れん坊をして遊び、殆どを勝ちで治めた。今の会話はそれについてのことである。

家に戻ったムラクモは元気に「ただいま」と言い、母であるルミナに抱きついた。ルミナは「あらあら」と言いながらムラクモの頭を優しく撫で、「お帰り」と言い、父であるアドルフも「お帰り」と言いながらムラクモの頭を撫でる。

少し荒っぽいが……。

「さ、手を洗ってきなさい？　もうすぐごはんよ？」
「うん！」

そう元気に返事をして、ムラクモは奥へと小走りで向かい、その背中を、二人は優しい眼差しで見つめていた。

その後、手を洗って戻ってきたムラクモは、今日あったことを楽しそうに話し、ルミナに「落ち着きなさい」と言われても尚話し続け、それは夕食の席でも同様だった。両親はその話をしっかりと聞きながら、明日からもムラクモが元気に過ごせる様にと、それだけを願っていた。

「お父さん、お母さん、お休みなさい」
「ああ、お休み。ゆっくり寝るんだぞ？」
「お休み、ムラクモ。明日も負けるんじゃないわよ？」
「うん」

寝室に入り、布団に入るとムラクモはすぐに夢の中へと旅立った。

「……」
「……」

先程とは打って変わって静かになった家の中で、アドルフとルミナは寄り添い合っていた。

「ムラクモも、もう六歳になるのね……」

静寂を破ったのはルミナであった。アドルフは静かにその言葉に頷く。

「こどもの成長って、早いわね……本当に」
「そうだな。もう少し成長すれば、力のことを話しても良いかも知れない」
「そうね。あの子なら、きっと正しく使うことが出来るわ」
「ああ。……なあ、ルミナ？」
「なに？」
「ムラクモが、村を出ると言ったらどうする？」

その問いにルミナは黙り込んでしまった。

ルミナも、もちろんアドルフもムラクモがずっと村にに止まっているいるような子ではないと分かっている。が、やはり子とずっと暮らしたいと言う思いはある。

「あの子が、それを本当に望むなら、私はその意思を尊重したいわ。あなたもそうよね？」
「……ああ」

もちろん、それはまだまだ先のことだろう。だが、ルミナの言う様に子の成長と言うのは早い。

その時はすぐに来るだろう。

「明日からも、あの子が元気に過ごせますように」
「心配ないさ。何せオレ達の息子なんだからな？」
「……ふふ、そうね」

二人は笑い合い、軽い口づけを交わした。

その後、ムラクモを挟む様にして横になり、二人は眠った。

星が煌めく夜空に、一人の少女がいた。後ろには少女に付き従うように、赤黒い鱗に包まれた巨体を持つ＜ブラッド・ドラゴン＞が静かに羽ばたいている。地上には、ハイス村近辺に棲む魔物。＜ラビ＞や＜ガルム＞が群れを成している。

「……」

少女は無言のまま下を見る。

そこにあるのはハイス村。

少女はおもむろに右手を上げ、一泊おいて振り下ろした。

――グォオオオオオォォオオオオオ！！

直後、雷鳴すら生温い程の咆吼が夜空の空気を震わせ、それに続くようにラビ達も雄叫びを上げた。

その日、ハイス村はたった一人の少年を残し、滅びを迎えた。

第一話・幕開け（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

第二話・失った物、そして……（前書き）

ムラクモ一人称です。途中から一人称が変わります。

第二話・失った物、そして……

目の前でお父さんとお母さんが殺された。

次はぼくを殺そうとガルムが襲いかかってきた。

――――そこからの記憶は無い。

翌朝、気が付いた時に見たのは、荒れ果てた家と、ぼくに手を伸ばして死んでいるお父さんとお母さんだった。

喉が引きつるのを感じながら、ぼくは二人に呼びかける。

いや、呼びかけようとした。

「――――」

けれど出来なかった。

声が出なかったから。

その後、何度試しても、ぼくの口から声が出ることは無かった。

原因は分からないけど、ぼくは声を出せなくなり、大切な人たちを失った。

声は出なかったけど、涙だけは止まることなく流れ続けて……でもお父さんとお母さんをこのままにしておくなんてこともできなくて、ぼくはお母さんの冷たくなった体を引きずって家の裏まで行き穴を掘って埋めた。

次にお父さんの体を引きずって、お母さんの隣に埋めた。

その時に見た村は、昨日までの村の面影すらない程めちゃくちゃにされていて、至る所に人が転がっていた。

それを見て、また涙があふれてきたぼくは天井がなくなった家に飛び込み、隅っこで体を丸くした。

それから、何日経ったのか分からない。

けど、じっとしているとお父さんとお母さんが殺された時のことを思い出してしまう。

気が付くと、ぼくは家から飛び出していた。

そのまま走り続けて足を止めた時、ぼくは近くの森にいた。

暴れる心臓が落ち着くのを待っていると、少し遠くに魔物の姿が見えた。

そいつは、二つの長い耳と黒い毛と赤い目を持つ魔物、＜ラビ＞だった。

見ていると、そいつもぼくに気付いたようで、ぼくを食べようとでも思っているのか、四本の足を使って走ってきた。

「――――！！」

声を出さずに叫び、ぼくもラビに向かって走った。

ただがむしゃらに殴って、体中至る所を噛みつかれたりして、服もボロボロになったけど、それでも手は止めなかった。

止めたら、そこで終わってしまう気がしたから。

仰向けに倒れて、鉛色の空を見上げる。

結果で言えば、ぼくは負けなかった。

でも、勝手もいなかった。

戦っている途中で、ラビの方が諦めたのか帰って行ったから。

この状態で、また魔物が来たら今度こそ死んでしまう。

そう思って、無理矢理体を起こしてぼくは村へと戻って、家に入った途端意識を失った。

翌朝、お父さんとお母さんが殺された時の夢を見て目が覚めた。

「……っ」

また涙があふれてきて、ぼくは、今度は自分の意思で森を目指して走った。

ラビを見つけて突撃し、無我夢中で拳を振るった。

体を動かしてさえいれば、二人のことを思い出さないから。

夢中で体を動かし続けた。

今度も勝ちも負けもしなかった。

家に戻ってまた眠る。

翌朝、今度は空腹で目が覚めた。

そういえば、ここ数日は何も飲み食いしていなかったことを思い出し、空腹であることを自覚すると、お腹の音が止まなくなった。

でも、もちろん食料なんて家にはない。

あったとしても、とっくに腐っていると思う。

でもここハイス村は、いつか＜ききん＞というものが訪れた時に備えて、毎年食料を少しずつ村の倉庫に保管していたから、もしかしたら少しくらいは食べられるものが残っているかも知れない。

奥にある倉庫に向かう途中、友達を見つけたけど、もちろん死んでいた。

他の人たちも同じ様に。

破壊された倉庫の破片などを避けながら中に入り、見てみると思った通り殆どがぐちゃぐちゃに潰れていて、とても食べられる状態じゃなかった。

その中を漁り、なんとか食べられるものを探し出し、少しだけ食べてあとは家に持って帰った。

これからは、できるだけ少ない食料で毎日を過ごさないといけない。

ごはんを食べて、また森に向かいぼくはラビと戦った。

相変わらず勝つことはなかったけど、二日前に比べればだいぶマシにはなった。

お腹を叩けば動きを鈍らせることができるのかも分かった。

その後、また家に戻って眠った。

それからは、二日に一回朝にごはんを食べるだけで、後は戦って眠るを繰り返して生活した。

服がもう着ることができなくなってしまったから、落ちていた布を適当に巻き付けた。

戦っている内に、傷の治りが早いことに気付いた。

最初は、ただ夢中だったから気が付かなかったのかも知れない。

ラビに噛まれた程度の傷なら、眠っている間にぜんぶ治っていて、偶に大きな怪我を負っても丸一日眠っていれば完治した。

でも、戦うなら都合の良い体であることは事実だから、特に気にせず戦い続けた。

約一年が経ち、ラビなら勝てる様になった。

お父さんが使っていた短剣を持ち、今度は灰色の毛を持つ魔物、＜ガルム＞と戦ってみようと思い、一体で行動しているガルムを探して森の中を歩き、見つけた所で周りに仲間がいないかどうかを確認して攻撃を仕掛けた。

ラビとは全く違う動きをするガルムに、最初はもちろん勝つことはできなくて、何度も逃げた。

途中、仲間やラビが来ることもあって本当に危ない時もあった。

それでも、戦うことは止めなかった。

二人のことを思い出して涙を流すことは無くなったけど、やっぱり思い出すのは辛いから……体を動かし続けた。

更に三年が経過した頃には、ラビはもちろんガルムにも負けなくなり、とっくに尽きた食糧を補うためなんとか食べられる様にして食べた。

最初は食べるのが辛かったけど、食べる内になれて、今は普通に食べることができる様になった。

骨を適当な所に埋めて、それに向けて合掌し、今日もオレは森へと向かった。

「グゥウウウウ……」

目の前で四体のガルムが威嚇している。

木を削って作った自前の木刀を構えて、オレも戦闘態勢を整えると、ガルムが一斉に飛び掛かってきた。

上体を捻ったり木刀で防いだりして捌き、一体を木刀で叩き、一体を殴って地面に叩きつける。

残っている二体に、踏み込んで一気に接近し横凪に一閃して吹っ飛ばすと後の木に叩きつけられ、地面に転がった。

木刀を逆手に持ち背中側に振るとガルムの鳴き声が聞こえ、次いで倒れる音が聞こえた。

最初に殴ったガルムが攻撃を仕掛けてきた訳だ。

四体全てを戦闘不能にすると、茂みから一斉に仲間が飛び出してきた。

保険をかけていたらしく、十以上はいる。

改めて戦闘態勢を取り、ガルムに備える

そして、一瞬の静寂の後聞こえたのはガルムの吠える越えではなく、かと言ってもちろんオレの声でもない。

――グオオオォォオオオオォォオオオオオオ！！！

森全体どころか、大陸全土に響きそうな、正しく天を衝くような咆吼だった。

それを聞き、ガルムたちは仲間を置き去りにして一目散に逃げ出した。

大きな翼が羽ばたいている音が聞こえて上空を見ると、巨大な影が差し、辺り一帯の木々を潰しながら、数メートル先に巨大な四肢を支えとして降り立った。

そいつは、赤黒い鱗に包まれた巨大な体と、同じく巨大な翼を持つ、本来この＜スレイジア大陸＞にはいない筈の＜ブラッド・ドラゴン＞だった。

ブラッド・ドラゴンは周辺を見渡し倒れているガルムを見つけると、その大きな口を開き躊躇することなく開きかぶりついた。

ガルムの鳴き声と同時に血が噴き出し地面を汚す。

勝てる訳がないことは分かっていた、けれど逃げることができなかった。

ラビやガルムなんかとは比べるのはおこがましい程の圧倒的な威圧感が、オレの体から自由を奪っていた。

どれだけ動かそうと思っても、足は竦みきってしまい指一本すら動かすことができない。

何も考えられずにいると、目の前に迫ったブラッド・ドラゴンが口を開き、闇が広がった。

親父とお袋、友達、村の人たちの顔。

それらが、次々と浮かんでは消えていった。

死ぬのか？

こんな所で、何も出来ないまま――――オレは死ぬのか？

そんなのはご免だ！

瞬間、ブラッド・ドラゴンの動きが止まり、おかしな動きを始めた。

いや、可笑しいと言うより、「あり得ない」と言った方が正しいか？

首の位置がずれている？

そんな感じだった。

そのことに疑問を抱いていると、何かがブラッド・ドラゴンの体を斬り裂いた。

そして、呆気なく崩れ去ったブラッド・ドラゴンは何か黒い物に呑み込まれ、肉片一つ残さずその場から消え、後にはなぎ倒された木々と、ブラッド・ドラゴンの血が残った。

黒い何かは、ゆっくりとオレに向かってきて、今度こそオレは終わると思い目を閉じた。

だが、どれだけ待っても何の衝撃も来ず、オレはそっと目を開けた。

目に映ったのは、黒い何かがまるでオレのことを心配でもしているかのように、目の前を忙しなく右往左往しているという……どう説明すれば良いのかよく分からない状況だった。

第二話・失った物、そして……（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

第三話・受け継いだ物（前書き）

今回でプロローグは終わりです。次回からは三人称で進めていきます。

第三話・受け継いだ物

何もしてくる気配はないので、まずは様子を見ようと思い一歩下がった。のだが、黒い何かはまるで、「離れないでくれ」と言わんばかりにぴったりとくっついてきて、胸に頭？を擦りつけてきた。

子が外出しようとする親にくっついて、「行かないでくれ」とせがんでいる様な物だと考えればわかりやすいか……？

まあ、よく分からないが……敵じゃないのかも知れない。

それなら、オレとしては助かる。ブラッド・ドラゴンをあんな簡単に斬り裂く奴が相手では、オレなど紙を斬る様に斬られてしまう。

と、考えている間も、黒いのはオレにぴったりくっついていた。

お前はオレの敵なのか？

「！」

いきなり黒いのが、ぶんぶんと勢いよく体？を振った。オレが思ったことを否定しているかの様なタイミングの良さに驚き、今度は別のことを思ってみる。

オレの味方か？

そうすると、今度は大げさな程体を上下させた。

その後もとりあえず思いつくことを思ってみると、全てに上下に振るか左右に振るか分からないと言う様に傾げる様な動作をし、こいつが、「オレの思っていることが分かる」ということが分かった。

さっきのブラッド・ドラゴンがまだいると思っているのか、あたりに魔物の気配は全くと言って良いほど無い。

安心して黒いのと会話、の様な物が出来た。

暫くそうして過ごした後、家に帰ることにして森を出口へと向けて歩く。

その間も、黒いのはオレから離れず、寝る時も離れることが無かった。

翌朝、目を覚ますと黒いのはいなくなっていた。

「……」

寂しいと……また出てきて欲しいと……そう、思った。

「！」

思った途端、足下から黒いのが出てきてオレに飛びついてきた。

訳も分からずにいると、黒いのがオレの手を引き立ち上がらせ目の前で動きを止めた。

――まるで、オレから何か言うのを待っているかの様に。

だから、オレは思いで伝えた。

よろしくな？

黒いのは、また何度も頷いた。

それから六年。

俺は十六歳になった。

成長した俺がしたことは、村を綺麗にすることだった。村人たちは、もう既にみんな骨になってしまっているが、そのまま放置しておいては決して報われることはないだろう。

埋葬することで、少しでも安らぐことが出来るのなら……そう思い、家族ごとに近くに埋葬した。それから、家の残骸なんかを＜ノア＞に呑み込んで貰い片付けた。

ノアと言うのは、黒い奴に俺がつけた名前だ。

ノアは、六年前ブラッド・ドラゴンに襲われそうになった時に現れた俺の力で、それ以来俺の相棒だ。聞いてみた所、十年前俺だけが生き残ったのも、ノアが守ってくれたからしい。

あの時意識が途切れたのは、その時の俺ではノアの力に耐えられなかったからだと思っている。ブラッド・ドラゴンの時は、ハッキリと意識があったからな……。

ノアは俺の思いを感じ取り、それによって形を変える。あの時、ブラッド・ドラゴンを斬り刻んだのは、俺に「死にたくない」と言う思いを、敵を倒すことで形に表した結果なのだろう。

それと、刀や槍、槌や弓矢など、色々な武器の形にもなれるから、戦闘の幅も広がり、場所に応じた戦い方が出来る。

弓矢に至っては、矢が切れる心配が無いからかなり使い勝手が良い。

まあ、俺は専ら刀だが……槍や槌も試してはみたが、親父から受け継いだのか刀の形が一番なじんだ。だから戦う時は、すぐに刀として出てくる様にノアにも頼んでいる。

少し脱線したか……。

とりあえず、普段の状態のノアは質量などに何の関係も無く呑み込むことが出来る。聞いてみた所、限界は無いと言うから大した物だと思う。実際目の前でブラッド・ドラゴンが全て呑み込まれたのを見た俺としては、疑うことなど最初から無い訳だ。

現に今も、言い方は悪いが、ただの木と化した家の残骸をどんどん呑み込んで……見ている内に全部呑み込み終わった。一体呑み込まれた物はどこに行っているのだろうか？と気にはなるが、なんとなく怖い気もするので聞いていない。

もし、見せてやると言う意味で俺まで呑み込まれたらどうなるか……。

最後に自分の家の片付けを始めた。

と言っても、十年間使っていた家だからな……そこまで散らかってはいない。少し整理するだけで終わりにしようと思い、細かい塵や埃をノアを箒の形にして掃いて、それだけで終わりにした。

が、ノアが家の床を見てずっと動かなかった。

ノア？

呼びかけても返事をしない。こんなことは今まで無かったから、俺も気になりノアが見ている一点を見る。

ノア！

一瞬にして槌に変わったノアを振りかぶって床に叩きつけると、床を砕いたとは思えない、鋼を叩いた様なガキン！という音が響いた

そして出てきたのは、少し大きな木箱だった。

それだけなら、「なぜ、こんな物があるのか？」という単なる疑問だけで終わっていただろうが、それ以上に俺は――俺とノアは驚きを隠せなかった。

ブラッド・ドラゴンすら簡単に斬り伏せたノアの攻撃をいとも簡単にはじき返したのだから、「驚くな」という方が無理だ。

なんとか平常心を保ち、いつもの状態に戻ったノアにははじき返されても大丈夫な様に後ろで支えてもらい、俺はそっと木箱に手を

伸ばした。

だが、警戒していたのは裏腹に俺の手は難無く木箱に届いた。

両手でゆっくりと箱を開け中を見ると、そこには綺麗に畳まれた一着の服と、その上に赤く輝く宝石が填め込まれたペンダントがあった。ペンダントを取り、次に服を取る。すると、その下に二つに畳まれた紙が置いてあった。

服とペンダントを下に置いて紙を取り、開く。

『我等が最愛の息子であるムラクモへ

お前がこの手紙を読んでいると言うことは、オレは今母さんに怒られているのか、それとも、オレもルミナも死んだのか……そのどちらかかも知れないな。まあ、どちらにせよ、お前ももう十六歳になったということか、めでたいことだな。

さて、本題に入ろう。

力のことは既に知っているな？　その力はルミナからお前に受け継がれたモノだ。詳しいことは、使っていく過程で覚えてくれ。そろそろ母さんに変わる』

そこで、字は親父のモノからお袋のモノに変わった。

『愛しのムラクモへ

力のことは、お父さんが書いたとおりよ。どうしてか分からないけど、私はその力を生まれた時から持っていたの。それで何かがあったって言う訳じゃ無いんだけど、一つだけ伝えておくわ。

力の使い方をどうか誤らないで。

私が力について伝えたいのはそれだけよ。

さて、手紙を読んでいるなら、箱に入っていた服とペンダントも見てるわよね？　その服は、昔お父さんが使っていた物よ？　見た目は只の着物と変わらないけど、物理攻撃や魔法に対する防御力はかなりの物だから、安心して良いわよ？

ペンダントは、私からの贈り物。

装備者の魔力を増幅させる力と、ある程度の魔法ならはじき返す力があるわ。

この二つがあれば何も問題ないわ！　さあ！　自分の目で見て、自分の手で触れて、自分の足で世界を回ってきなさい！　村とは比べものにならないドキドキが貴方を待ってるわよ！

あ、それと、大事な人が出来たら連れてきてね？　楽しみにしてるから』

手紙はそこで終わった。

とりあえず、思ったのは……「お袋ってこんな性格だったっけ？」ということだ。それと、紙面とは言え、こうも急に変わられると呼んでる側としては少し戸惑う。

もしかしなくてもこっちが「素」なんだろうか？

黒い着物を着て、ペンダントを首から提げ、少し髪が邪魔だったから、首の辺りで束ねた。

準備を整えた俺は家の裏に回り、親父とお袋が眠っている場所に向けて手を合わせた。

『行ってきます』

口だけを動かし、心の中でそう言って、俺は外に向けてノアと共に歩き出した。

村の出入り口を出て、振り返り見たのは、家なんて一つも無いとても「村」とは言えない状態のハイス村。

十六年間過ごしたこの村に、思い入れが無い訳などなく、名残惜しい気持ちが胸に広がる。

そんな俺の気持ちを察してか、ノアがすり寄ってきた。

大丈夫だと、そう思いを込めながら撫でると、安心したのかそっと離れ、自分から消えた。

俺の意思に反応して出てくることが殆どだが、偶にこうやって自分から消えたり出てきたりする。

「……」

さて、出発するとしようか。

何が起こるかなんて分からないが、それでこそ旅ってのは楽しい物だろう。

面白い奴にも会えるかも知れないしな。

第三話・受け継いだ物（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

次はムラクモのプロフィールと世界の事を少し載せます。興味が無ければ飛ばしてくれて構いません。

主人公・世界観紹介（前書き）

必要無いとは思いますが一応載せておきます。

主人公・世界観紹介

名前：ムラクモ・ナイレット　男　十六歳
属性：闇
身長：１７８？
体重：６７？
利き腕：左
正確：温厚。
　切れると怖い
　……具体的に言うと、終始笑顔を浮かべて相手に直に怒気やらをぶつける。

スレイジア大陸北端にあるハイス村に住む極々一般的な少年だったが、突如魔物の襲撃を受け両親と村の仲間を失う。原因は分からないが、その時に声も失ってしまった。それから四年間は一人で魔物と闘いながら生活し、本来はスレイジア大陸にはいない筈のブラッド・ドラゴンに襲われそうになった際、力が目覚め退ける。
我流で戦い続けた為、気配を隠す手段や探る手段に長けている。
それ以来は、その力にノアと名をつけ共に六年間生活し、十六歳になったある日、両親から譲り受けた着物とペンダントを装備し村を出た。
ノアを刀の形に変形させ戦う。

ノア

ルミナから受け継がれたムラクモの持つ力。主の思念に反応して形を変える。

世界名：ガルシデア

＜ライドメイル家＞が治める＜ライドメイル大陸＞

＜マクトウェイ家＞が治める＜マクトウェイ大陸＞

＜イノセイド家＞が治める＜イノセイド大陸＞

＜ファイゼン家＞が治める＜ファイゼン大陸＞

＜スレイジア家＞が治める＜スレイジア大陸＞の五つの大陸から成り立っている。これら五つはそれぞれが＜世界貴族＞と呼ばれており、力の強い所から大きな大陸を治めている。

見て分かる通り、＜スレイジア家＞は五つの中で最下位に属している。

中央にある最も規模の大きな＜ライドメイル大陸＞を東西南北から囲むように他四つの大陸がある。

本来＜ブラッド・ドラゴン＞等の龍種は＜ライドメイル大陸＞に多く棲息している。

＜終焉戦争＞

十年前、世界各地で魔物が原因不明の暴走を起こし、それにより勃発した人と魔物の戦争。

波の様に押し寄せる魔物達の軍勢が、世界を飲み込むように見えた事からそう名付けられた。

＜属性＞

火・水・風・地・氷・雷・光・闇の八つの属性が存在し、一人一つが基本となっている。確かめるには体内のマナを指先に集める、又は手のひらの上に出現させる方法があり、その色によって判断される。

火は赤。

水は青と言った具合。

だからムラクモは黒。

補足説明――――マナの色と髪・目の色は一切関係ない。

水で赤い髪の人もいるし、火で青い髪の人もいる。

ムラクモは単に偶然一致しただけ。

主人公・世界観紹介（後書き）

こんな感じです。

出ないよう努めますが、以降矛盾点などを見つけた時は遠慮無く報告してください。

第四話・キャロル＝ド＝スレイジア

ムラクモが旅に出たその日の深夜、スレイジア王国付近にある＜始まりの森＞に一人の少女がいた。

実は今、ムラクモもこの森にいるのだが、両者とも互いの存在には気が付いていない。

「はあ、はあ……ここまで、来れば、大丈夫かしら？」

この少女の名は＜キャロル＝ド＝スレイジア＞。

スレイジア王国王女、十四歳である。

まだ幼さの残る、けれども端正な顔立ち。

流れる様に腰元まで届いている銀色の髪は月光を受けてキラキラと光を放ち、蒼い右目は冷たい印象など与えることなく、逆に暖かい印象を抱かせる。

そして、何より見る者が注目するのは、その＜黒い左目＞だろう。

これには少し事情があるのだが、それは追々説明するとしよう。

そして腰にはスレイジア家の家宝である＜宝刀・シュヴァイス＞を提げている。

鞘、柄から刀身――その全てが白で統一されている。

「それにしても……やけに警備が薄かったけど、どうしてなんだろう？」

現在キャロルが疑問に思っていることは、城を抜け出すさいの警備の薄さである。

本来ならば、深夜とはいえ、城に仕える騎士団が交代制で警備を行っているが、キャロルの自室付近には人っ子一人いなかったのだ。

陽の高い内に準備を整えていたキャロルは、まずは部屋の番をしている二人の騎士をどのようにして撒こうかを考えていたのだが、結局良い案が浮かばずに夜を迎えた。

だが、いざ外に出てみるとそこには番の二人どころか他の騎士すらいなかった。

「もしかして……王さ……お父様達には気付かれた？　でも、それなら追っ手が来るはずだし……う～ん……」

キャロルの中では、「気付いているなら警備を厚くする筈」と言う考えが浮かんでおり、ある種の矛盾点を見つけたことで余計に頭を抱えてしまっていた。

実際はキャロルの考えの通り、王も王妃も娘がここ数日の内に城を抜け出すことを知っていた。

キャロルが外の世界に人一倍思いを馳せていたこと両親だけでなく城に仕える者全員が知っていることであり、皆その願いを叶えて

あげたいと強く思っていた。

そのことを知るのは当分は先のことであるが……。

「考えても仕方ないか。今は気付かれないだけで、明日になったら追っ手が出されるだろうし……とりあえず進もう」

考えを切り替え、キャロルは森を進み始めた。

と言っても、現在の時刻は既に前述した通り既に深夜を回っている。

少し進んだところでキャロルは腰に付けている小さなバッグから人一人ならすっぽり包み込める程の大きさを持つ布を取り出した。

このバッグは限界こそあるが、その限界に至るまでならどれだけ大きな物でも収納することが出来るという便利な物だ。

キャロルが取り出した布は、＜グリッサ＞という、火属性の魔物の毛皮から出来ており、毛皮そのものが熱を帯びているので夜や寒い地方では重宝されている。

「この辺りでいいかな？　魔物も、思ってた程いないし」

魔物がいないその理由――キャロルがムラクモの様に気配を探る術に長けていたならすぐに分かっただろうが、これまで十四年間、キャロルは魔物との戦闘を行ったことがない。

今までは、騎士団の訓練を近くで見ながら我流で剣術の腕を磨き、十一歳になった時から団員の中に混じり実戦訓練も行っていたが、やはり相手が王女となっては手加減抜きで戦うと言うのは憚られる――そういった騎士が殆どだった。

本人がいくら「手加減しないでください」と頼んでも、やはりどこかで手を抜いてしまうのは仕方がないことであろう。

そういった理由で、キャロルはまだ本気の戦いと言うのを経験したことがない。

だが、剣術の腕は騎士団員にも負けていない――いや、間違いなく騎士団よりも強いだろう。

それほどキャロルの剣の才覚には目を見張る物があった。

（森を抜けたら、道なりに進んで＜レークナ＞に行って、ギルドに登録して……その後のことは……それから考えればいいか）

眠い頭ではそれ以上考えることが出来ず、キャロルは眠りについた。

ギルドと言うのは、それぞれの街にある施設であり、魔物の討伐や薬草の採取などを行い、報酬を得る場であると同時に、酒場の機能も果たしている。

もし、この考えを両親含め城の者が聞いていたなら、全員が止め

に入っていただろう。

まだ十四歳の少女をそんな所に送り出すのは親でなくとも心配する。

それほど、スレイジア家が国民から受ける信頼が厚いということでもあるのだが。

翌日、目が覚めたキャロルは水筒の水を顔にかけて残っていた眠気を飛ばし、そこで大きな力を感じたのだが、一瞬だったため気の所為と片付けた。

荷物を片付け、出発しようとしたキャロルはそこで、はたと自分が王女だと気付いた。

おかしな表現だが、彼女に取って自分が王女だということは当たり前ではない。

事情はあるが、それも追々説明するとしよう。

とにもかくにも、自分が王女だと気付いたキャロルは、自身に姿を変える魔法をかけた。

銀色の髪は深紅に変わり、両目も同じ紅に変え、自分の髪を一房つかんで魔法がかかっていることを確認した所で奥へ向けて出発した。

途中、キャロルはいくらなんでも魔物が少なすぎることに疑問を

感じていた。

（ここまで一回も魔物に遭遇しないなんて……どうなってるのかしら？）

出発して数時間、そろそろ中心部に到達すると言うのに、一度も魔物はキャロルの前に姿を現さなかった。

（実戦を一度も経験出来ないのは……先のことを考えると不安なんだけど、魔物を呼ぶ魔法なんてないし……）

恐らく一般的な十四歳の少女なら、魔物を呼ぶ魔法云々を考えることは無いだろうが、育った環境が違うのだから仕方ないと言えば仕方ないのだろう。

そして、これから起こることはある意味ではキャロルに取って幸運である。

――ギャオオオオオオオ！！

「ッ！　なに！？」

突然聞こえた咆吼に驚き、キャロルは辺りを警戒した。

次いで聞こえてきたのは大きな地響きと、木々が倒れていく音。

そして見えたのは――

「な……何で、龍種がこんな所にいるのよ」

自身の数十倍はあろうかと言う巨体を持つ青いドラゴン、＜ワイバーン＞である。

初めて遭遇した魔物が龍種であることにキャロルは戸惑ってしまい、なぜスレイジア大陸に龍種がいるのかと言う疑問を考える暇も無く、只ワイバーンを目の前にして動けなくなるだけであった。

そして、そんなキャロルをワイバーンがみすみす見逃す訳も無く、低い唸り声を上げた直後その口から炎を吹き付けた。

「しまっ――」

やっと体を動かそうと思った時には既に遅く、炎は眼前まで迫っており、キャロルは恐怖のあまり目を閉じてしまった。

そんなキャロルを突如現れた一人の人物が炎の届く寸前の所で救出した。

同時に足下から黒い靄の様な物が出現し、ワイバーンに向かっていったかと思うと一瞬にしてその体を斬り刻み、全てを呑み込んだ。

突然の浮遊感に襲われたキャロルは何が起こったのか、と思い目を開けた。

そして、キャロルを助け出した人物もワイバーンが呑み込まれたことを確認し、自分が助け出した少女の身に何も起こっていないか確かめようと視線を下に降ろした。

そうなると当然二人の視線は交錯し、見合う形となる。

「……」

「……」

少しの間両者とも無言となった。

（真っ黒な髪……綺麗だなぁ……どんなお手入れしてるんだろう？それに見た目は細いけど、体つきもがっしりしてるし、有名な冒険者だったりするのかな？）

キャロルがそんなことを考えてる間に、黒い靄の様な物も役目を終えたと言わんばかりに青年の足下に戻っていきやがて消えた。

その後、青年はキャロルをそっと地面に降ろした。

「（もう少し抱っこしといて欲しかったかも……）えっと……助けてくれて、ありがとう」

ワイバーンはどこに行ったのか？

今の黒いのは何なのか？

疑問があるにはあったが、キャロルはまずはお礼を言うべきだと思いそう言った。

キャロルの言葉に、青年は笑いながら「構わない」と言う様に首を横に振り、その様子を見たキャロルは名を名乗ることにした。

「貴方、名前は？　わたしは、キャ――」

そこでキャロルはまた自分が王族だと気付き、名乗りを不自然なところで止めてしまった。

「？」

青年の方もいきなり途切れた少女の言葉に、どうしたのかと首を傾けるが、当のキャロルはそのことに気付いておらず、

（どうしよう？　仮にもわたしは王女だし、本名を言ったら、いくら姿を変えてるって言っても、この人もわたしのことに気付くよね？　うあ～……えっと……あ、そうだ！　別の名前を名乗れば良いんだ！　えっと、キャロル＝ド＝スレイジアだから……「キャシー」！　うん！　キャシーにしよう！）

と、いうことを考えていた。

本人は気付いていないが、考えている最中頭を抱えたり呻き声を上げたり、体を捻ったりと実に様々な動きをしていた為、青年のキャロルに対する第一印象は「面白い奴」と言う物になっていたのは、当然と言えば当然だろう。

「ごめんなさいね？　わたしは『キャシー』。貴方の名前は？」

「……」

キャロルの問いに、青年は無言で返した。

一瞬、聞こえていないのかと思ったキャロルであったが、この距離で、しかも周りの音が一切していない状況で聞こえていないというのはあり得ないだろうという結論に至り、実際青年にはちゃんと聞こえていた。

「ねえ、ちゃんと聞いてる？」

青年は聞こえていると言う意味を込めて頷いた。

だが、そうするとキャロルから「じゃあ、答えて」と返ってくるのは当たり前だ。

青年はどうしようか困ってしまい、導き出した答えが、

「あっ！　ちょっと、どこ行くのよ！？」

その場から退散することだった。

走って森を進み、出口へと近づいていく青年をキャロルも負けじと追いかける。

途中、ついさっきまで全く出てこなかった魔物達が出てくるようになったが、今のキャロルにそんなことを気にする余裕は無く、構わずに青年を追い続けた。

当の青年にももちろん魔物は襲いかかっているが、青年は黒い刀を用いて一刀の下に斬り捨てていく。

走りながら、キャロルはその剣筋に見惚れるという器用なことを

行っており、同時にどこから刀を出したのかと言う疑問も抱いていた。

「刀所か荷物を入れる物すら持ってないのに……どうなってるの？
それに、服も見たことない物だし」

青年が来ている服はキャロルの様に上と下で分かれている物では無く、一枚の布で作られており、腰に巻いている大きな帯で止めているという……キャロルにとっては不思議でならない衣装としてその目に写っている。

ドレスなどを見たことが無いキャロルでは無いが、見たことの無い型をしている為そう写っている。

疑問を抱きながらも、木の枝などはしっかりと避けながら青年を追いかけ、夢中になっていたからか、すぐに出口へと辿り着いた。

先に抜けていた青年は流石に疲れたのか少し先で息を整えていた。

「はあ……はあ……やっと、追いついた」

もちろんその青年を追いかけていたキャロルも疲れている、が、ここで逃がすと次も追いかける自身は無い為、小走りで駆け寄り青年の前に出た。

「どうしていきなり走り出したのかは分からないけど……名前くらい教えてくれてもいいんじゃない？」

「……」

それでも青年は口を開かない。

代わりに出てきたのは、あの黒い靄だった。

「！」

何か来ると思ったキャロルはシュヴァイスを抜き構え、それを見た青年は素直に感心していた。

隙が無いからである。

だからと言って腕も達者とは限らないが。

「何をするつもり？」

「……」

相変わらず青年は答えず、またも代わりに黒い靄が動いた。

地面に伸びたそれは土を削り何かを書いていく。

「？」

自分に危害を加えるつもりはないと、なんとなくだが分かったキャロルは構えを解き、けれどシュヴァイスは握ったままでそれを眺め、最後にジャリ、と音を立てて黒い靄は地面から離れ、その文字をキャロルは目で追った。

「？　これ、なんて書いてあるの？」

しかし、読むことができなかった。

「？」

首を傾げた青年は、自分もその文字を読み、自分視点で書いていることに気付きキャロルを手招きした。

それに従い、青年の横に並んだキャロルは、青年から文字列を指さされもう一度眺め、その文字が青年から見た方で書かれていたことに気付き、その文字を声に出して読んだ。

そこにはこう書かれていた。

「『俺の名前は、ムラクモ・ナイレット』」

と。

第四話・キャロル＝ド＝スレイジア（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

次回からキャロルはキャシーと統一します。

偶にキャロルになるかも知れませんが、殆どの場合はキャシーと表記します。

第五話・読唇術とギルド登録（前書き）

ムラクモの台詞はモノローグは（）。

モノローグ中にノアを使って話すときは（「」）。

読唇術の時は『』で表していきます。

ややこしいですがご了承下さい。

第五話・読唇術とギルド登録

ムラクモが自己紹介をした後、二人は丁度良い高台を見つけそこで一旦休憩することにした。ムラクモは全く問題等無かったのだが、自分が助けた少女をそのまま放っておくと言うのもやはり憚られるのだろう。

休憩を終え、先に立ち上がったムラクモに続きキャシーも立ち上がり、二人並んでレークナへと続く街道を歩き始めた。が、ムラクモは何故キャシーが付いてくるのかを疑問に感じていた。

休憩中、辺りの気配を探っていたムラクモは、強力な魔物はいないことを知っている。

ムラクモにとって強力の基準は＜ブラッド・ドラゴン＞なのだから、辺りにそんな魔物がいないのは当たり前なのだが、昨夜森に入った時、ムラクモはワイバーンの気配を掴んでいた

キャシーの気配も注意深く探っていれば掴めただろうが、なにぶんワイバーンの力が強く掴めずにいたのだ。

「ねえ、さっきから気になってたけど、貴方どうして喋らないの？」

キャシーは先程の自己紹介の時もそうだが、それ以降もムラクモが一言も発していないことが疑問だった。いくら初対面とはいえ、二人しかいないこの状況では喋らないことはあまり無いだろう。

だが、ムラクモはそんなことを気にした風も無く黒い靄と遊んで

いた。

じゃんけんで……。

それは関係ないことだが、目の前の人物が一言も発することが無ければ気にするなという方が無理な話である。

「……」

質問されたムラクモはノアを出現させ、先程の様に地面に文字を書いていった。キャシーもムラクモとの距離を詰めて見やすい体勢を取る。

（小さいな……俺より年下なのは間違いないが、十……四、五辺りか？）

ムラクモとキャシーの身長には頭一つ半程の差がある。並んで歩いていれば、恐らく周りからは兄妹か何かに見えるだろう。

心の内で別のことを考えながらも、ノアには地面に文字を書かせると言うなんとも器用なことをしつつ、ムラクモは話せない事情を書き終えた。

その文字列をキャシーはまた声に出して読んでいく。

「えっと……『原因は分からねえけど子どもの頃に声を失っちまって、それからずっと喋ることができなくなった』って……貴方、辛くないの？」

読んでいくにつれ尻窄みになっていったキャシーは、読み終えた後ムラクモの顔を見ながらそう聞いた。だが、ムラクモは特に気にした風もなく、「別に」という様に首を横に振った。

キャシーは、声が出ないと言う体験をしたことは無い。

無いが、その辛さは少し考えれば分かることだろう。

「何も伝えられないのよ？　『今日は何がしたい』とか『明日はこれがしたい』とか、食事で『何が良い？』って聞かれても、何も伝えられないのよ？　それなのに、本当に辛くないの？」

まるで自分のことの様に言うキャシーを見て、ムラクモは優しく頬笑んだ。

「ん……なに？」

そして、キャシーの頭に左手を乗せそっと撫でた。

戸惑うキャシーをよそに、ムラクモはまたノアに頼み地面に文字を書いていく。

キャシーはその文字列を今度は声に出さずに読んだ。

（「キャシーは優しいな。確かに何も伝えられねえけど、俺の周りの奴は親父とお袋も含めてみんな死んじまったから、そんなこと心配しなくてもいい」
「そんなこと」で片付けられる問題じゃない……周りに誰もいないなんて、悲しすぎるよ、そんなの）

自分では耐えられない。

キャシーはそう感じていた。

その後、キャシーは何も言わず下を向いてしまい、沈黙が二人を支配していた。

（腹減った）

と言うわけでもないらしい。

ムラクモは全く持って場違いなことを考えており、「ガルムかなんか出てこないかな～？」と、食料のことを考えていた。

その願いが通じたのかどうかは分からないが、丁度良いタイミングで茂みがガサガサと音を立て、六体のガルムと一体の＜ヘルガルム＞が姿を現した。

ヘルガルムはガルムよりも一回りほど大きい魔物であり、その体は赤い毛で覆われている。この辺りでは少し強い魔物の部類に入るだろう。

だが、

（お！　飯発見！　ノア！）

ムラクモにしてみれば「食事」としか写らない様だ。余程腹が減っ

ているのだろう。

「！　魔物！」

ムラクモはノア、キャシーはシュヴァイスを構えた。

（一気に行くぜ！　ノア！）

「え？　ちょ！」

構えるとほぼ同時にムラクモはガルムの群れに一足跳びで近づき、

「ガウ！？」

驚いているガルム達を一撃で全て倒した。

「は――？」

キャシーはたった今目の前で起こったことが信じられず、頓狂な声を上げた。

今の今まで隣にいた人物が一瞬で魔物の群れに近づき、同じく一瞬で七体を斬り捨てたのだから当たり前だろう。

（騎士団でも、あんな動き出来る人なんていない……何者なんだろう？　ムラクモって）

そう思いながら、キャシーはムラクモの元まで小走りで駆け寄り、そこでまた驚いた。

「え！？」
（うお！　ビックリした）
「あ、ごめん」
体を跳ね上がらせたムラクモにキャシーは謝り、改めてガルム達を見た。
「ねえ、どうして血が出てないの？　斬ったよね？」
キャシーが驚いた理由、それはガルム達の体から血が出ていないからだった。
（「内蔵器官にダメージを与えて心肺活動を停止させたんだよ。なあ、お前火持ってるか？」）
「火？　ううん、持ってない」
地面に書くのが面倒になったムラクモは、ノアの形を変えて伝えることにしたらしく、キャシーの目の前に黒い文字列が並び、その質問にキャシーは答えた。
（「そうか」）
それだけ答えたムラクモは、ヘルガルムを持ち上げノアの中に放り込んだ。それを見てキャシーはまた驚きの声を上げた。
（忙しい奴だな）
そう思いながら、ムラクモはガルム達も次々とノアの中に収納していく。

（うし、サンキュー、ノア）

パシン、と手を叩くムラクモとノア。

「さっきから質問ばかりで悪いんだけど、その黒いのは何なの？」

（ん？ああ。「お袋から受け継いだ力でな。名前は『ノア』。質量とかに関係なくなんでも呑み込めるんだ。しかも限界が無い。さっき、ワイバーンを呑み込んだの、見てなかったか？」）

「限界が無いって！　ていうか、ワイバーンを呑み込んだ！？　嘘でしょ！？」

（「本当だよ。お前、ワイバーンがどっか飛んでいくのでも見たか？」）

「……そう言われると、確かに」

（「だろ？　それに、今だってガルム達を呑み込んだじゃねえか」）

「……」

それを言われると、見ていただけにキャシーは何も言えなくなった。

（「んで、いきなりだが、お前これからどうする？　俺はとりあえず道なりに進むつもりなんだが」）

「……わたしはレークナに行って、ギルドに入るわ」

（ギルドね。そういや、そんなのもあったな。「そうか。じゃあ、そこまでは一緒でいいか？」）

「ええ」

（「んじゃ、あと少しだけど、よろしくな？」）

「よろしく」

ムラクモとキャシーはお互いの手を取り合った。

「それはいいんだけど、そのノアを使って文字を書くのは止めて。なんか嫌」
（「じゃあ、どうすりゃいいんだ？　『話せない』ってのは、さっき言ったろ？」）
「……」

至極真っ当な疑問に、キャシーは何も考えていなかったようで黙り込んでしまった。髪を弄りながらどうしようかと考えている。

これは彼女の癖であり、悩んだ時や考え事をする時はいつもこうしている。

そのまま数分が経過し、その間ムラクモはノアを短剣に変えてポンポンと軽く投げて遊んでいた。

「読唇術」
（は？）

やがてぽつりと言ったキャシーの言葉にムラクモは心中で頓狂な声を上げた。

「うん。口の動きで何を言ってるのか分かれば、それで会話が成り立つわ」
（そんなこと出来るのかね？）

その疑問にノアは首を傾げるように体を傾けた。

「という訳で、今から練習するわよ？　ほら、何か言ってみて？」

ムラクモとは反対に、キャシーはすっかりやる気になっており、「いつでも来い」と言わんばかりにムラクモの口を見ている。一度溜息を付いたムラクモは、「やるだけやってみよう」と思い、適当に自分の名前を言ってみた。

「『ムラクモ・ナイレット』？」

「！」

「あ！　その反応、合ってるのね！　やった！」

ムラクモの反応を見て、言ったことが合っていると判断したキャシーは、まるで花が咲いた様に満面の笑みを浮かべ、その場でぴょんぴょんと飛び跳ねた。

「ねえ！　次、今度は別のこと言ってみて？」

若干興奮しながら言うキャシーの言葉に戸惑いながら頷き、ムラクモはハイス村から来たことを言った。

「ハイス村？　へ～……大陸の北端ね。それであの森にいたんだ」

「！」

またしても見事に当てられ、ムラクモは驚きを隠せなかった。

「あ！　また当たった！」

またしても、キャシーは飛び跳ねて喜びを表現し、飛び跳ねる度に赤い髪が風を受けて広がる。

キャシーが貴族世界貴族の一家である、＜スレイジア家＞の娘で

あることは既に前述している。

年に数回程、中央の＜ライドメイル大陸＞では大規模なパーティが開かれ、もちろん、＜スレイジア家＞も参加した。その中で、様々人物を見てきたキャシーは自分でも気付いていないうちに口の動きで何を言っているのかが分かる様になっていた。

その中には、悪意に満ちた言葉もあった。

というより、悪意に満ちた言葉しか無かった。

最下位に属するスレイジア家は常に、他の四つの世界貴族から蔑まれ続けていたのだから。

話を戻そう。

とにかく、キャシーは相手が余程早口や、見慣れない動きでない限りはどんな言葉でも動きだけで読み取れる様になった。

「やった！　これでちゃんと話せるわね！」

（……まあ、いいか）

ムラクモも、悪い気はしない様で、喜ぶキャシーを頬笑みながら見ていた。

その後、二人は会話を楽しみながらレークナに向かって進み、夜寝る時、またキャシーは驚いた。

「毛布にもなるって……その子すごいわね？」
『だろ？　しかもかなり暖かいんだぜ？　お前も一緒に使うか？』
「は！？　何いってるのよ！」

ムラクモの言葉にキャシーは何を想像したのか、顔を赤くしながらそう言い自分の持っている毛布にくるまった。

（暖けえのにな……）

ムラクモもノアにくるまり目を閉じた。

翌日、目を覚ましたキャシーは、水を被って眠気を飛ばし、未だ眠っているムラクモの顔を見た。

「結構格好いいな……」

言いながらキャシーはムラクモの頬をつつき、それで目が覚めたのか、ムラクモはガバリと勢いよく起き上がった。

毛布を片付け、腰にシュヴァイスを差し準備を整える。

それからムラクモが目を覚ますまでの約三十分、キャシーはムラクモの寝顔をずっと見ていた。

数時間後、レークナに到着した二人はまずはギルドに向かうことにした。

途中ムラクモは、初めて見る村以外の建物を終始興味深げに観察しており、そんなムラクモをキャシーはくすくすと楽しげな笑みを浮かべて見ていた。

二人とも気付いていないが、笑顔を浮かべるキャシーに男女問わず見惚れていた。

「ここはね、王国に一番近い街だからいろいろな物資が揃うの。武器や防具なんかも、沢山あるんだよ？　後で見てみる？」

様々な家が建ち並ぶ街を眺めているムラクモに、キャシーは簡単にだがこの街のことを説明し最後にそう提案した。

『そうだな……つっても、ノアがいるし、防具もこれで事足りるんだが』

「でも、薄すぎない？　その衣装」

『確かに薄いけどな。お袋が言うには、相当高い防御力を持ってるらしいぜ？　それと、このペンダントはある程度の魔法なら弾き返すことができるんだとさ』

「そうなの？　只のペンダントかと思った」

『俺も最初はそう思ったけどな……ノアの攻撃も弾いたから、本当だと思うぜ？』

ムラクモはノアの力を、魔法の一種だと考えている。そう考えると、箱を見つけた時に弾き返されたことも説明が付くからだ。

（でもな……過信してる訳じゃ無いが、ノアの攻撃を弾くってことは、このペンダントが防げない魔法なんて無いんじゃいないか？ブラッド・ドラゴンもワイバーンも一瞬で片付けるし）

「まあ、貴方が良いならそれで良いけど……っと、着いたわよ？」

話している間に目的の場所に到着した様で、キャシーは少し先に行ってしまったムラクモを呼び止めた。戻ってきたムラクモが、ギルドの扉を開け躊躇い無く中へと入っていく。キャシーは少し緊張しているのか、ムラクモの着物の裾を小さく摘み後をついて行く。

（酒場にもなってんのか……やけに注目されてるのは、キャシーが可愛いからかね？　別れた後に何も起こらないといいが）

ギルドに入った二人を初めに迎えたのは、中にいる者達から容赦なく浴びせられる視線だった。特に男からの視線が多いのは気の所為ではないだろう。

だが、ムラクモは全く気にせず奥へと進み、受付の元まで辿り着いた。

『キャシー、俺話せないから、手伝ってくれるか？』

「え？　あ、うん、分かった。あの、わたし達、登録しに来たんですけど」

「分かりました。こちらの用紙に必要事項を書いていただけますか？」

「はい」

紙と筆を受け取り、名前、年齢、出身地を記入し、受付の人に渡すと、記入漏れが無いかを確認し始める。

「結構です。カードを発行しますので、少々お待ちください」
「はい」
書類を持ち奥に行ったのを確認すると、ムラクモはギルドのことをキャシーに聞いた。
「ギルドは、民間の人から魔物の討伐依頼や採取依頼をこなして報酬を得るの。簡単に言えば、『何でも屋』って所かな？」
『何でも屋、ねえ……それって、仕事を横取りされることなんかもあるのか？　達成間近で取られるとか、自分が採取した者を強奪されるとかさ』
「もちろんあるわ。でも、貴方の例を借りるなら、前者はその人の実力不足だし、後者も結局は奪われる人の力不足なのよ」
『……弱肉強食の世界って訳か』
「そういうこと。どれだけ立派な志を持っていても、力が無ければ何もできないわ。嫌な言い方だけどね」
「お待たせいたしました」
そこで受付の人が、二枚のカードを持って戻ってきた。
「こちらがムラクモ様、こちらがキャシー様の物となります。紛失されますと、再発行には百ギールが掛かりますので、ご注意ください。何かご質問はありますか？」
『（結構高いんだな……）なあ、この『ランク』って欄はなんだ？　何も書いてねえけど』
「そこは今から自分でやるの。質問は特にありません。ありがとうございました」
「いえ。それでは、これからのあなた方の活躍を期待しております」

その後二人は空いている席に座り、ムラクモはランクについての説明を受けることになった。

「ランクは、その人の力量のこと。G～EXまであって、もちろん上に行くほど強いってことになるわ。依頼にもランクはあって、自分より二つ上のランクの依頼までしか受けられないの」

『結構面倒なんだな？』

「ランクの低い人がドラゴン退治なんて受けても、結果は目に見えてるでしょ？」

『成る程。それで？　どうすれば自分のランクが分かるんだ？』

「カードの中央に少し窪んでるところがあるでしょ？」

言われてムラクモはカードの中央を見る。

そこは確かに少し窪んでいた。

「そこに自分のマナを集中させれば、それで分かるわ」

（マナを集中ってもな……）

そんなことをしたことの無いムラクモは、どうすれば良いのか分からずとりあえず指先に力を集めて見るか、という感覚でマナを集め、中央に押し当てた。キャシーも同じように、指先にマナを集め中央に押し当てる。

（お、出た、のはいいが……微妙だな）

「E、か。ムラクモは……って、どうしたの？」

自分のランクを確認したキャシーは、ムラクモのランクを聞こうとしたが、微妙な表情をしているムラクモを見て何かあったのか、と思いそう尋ねた。

『いやな？　俺としては微妙なランクでさ』
「なんて表示されたの？（あの戦い方からしても、結構高ランクだと思うんだけど）」

しかし、そんなキャシーの期待は大いに裏切られることになった。

『F』
「は！？」

ムラクモのランクを聞いた途端大声を上がったキャシーにギルド内のほぼ全員が注目した。

第五話・読唇術とギルド登録（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

第六話・ムラクモＶＳ金髪男

「あ、すいません」

恥ずかしかったのか顔を赤くしながら席に着き、一つ咳払いをするキャシー。

『どうしたんだよ？』
「どうしたもこうしたも！　なんでわたしより低いのよ！」
『んなこと言われてもな……』
「だって！　ガルムの群れを一撃で倒したし！　ワイバーンだって一瞬で片付けたんでしょ！」
「ほう。その話、詳しく聞かせて貰おうか？」
「え？」

キャシーが叫んだ時、話を聞いていたらしい金髪の男がムラクモを見下ろしていた。周りの者達も興味を持ったのか、二人を見ている。

「ワイバーンを倒したとはどういうことだ？」
「……なに？　あなた」
「質問しているのはオレだ」
「む」

男の態度に頬を膨らませ、キャシーはムラクモを見た。

『ま、さっさと答えて、さっさと退散してもらうのがいいんじゃね

え？　面倒だし』
「……そうだけど……信じるとは思えないわよ？　龍種がこの大陸にいるってだけでも、きっとここにいる大半の人が信じないわ」
「何を言っているかと思えば、そんなことは当たり前だ。龍種は＜ライドメイル大陸＞にしか棲息していない」

そう言う男を見た後、またムラクモに視線を戻した。その目は言外に「言った通りでしょ？」と言っている様にムラクモに写り、ムラクモも「確かに」と共感していた。

そしてノアに出てきて貰い、ムラクモはその中に無造作に手を突っ込み何かを探し始めた。

（え～と……お、あった）

その中から目的の物を見つけたムラクモは、それが片手では持ちきれない大きさの為、両手で引っ張り出し机の上に置いた。

それはドシン！と大きな音を立て、机を軋ませた。

言わなくても分かっていると思うが、ムラクモがノアを出現させた時点でギルド内にいた全ての人間が驚いていたのだが、そこから出された物を見て皆は一言も発することができなくなった。

その中でなんとかキャシーだけが口を開いた。

「あ、貴方……これ……ワイバーンの……く、く」
『ああ。ワイバーンの首』
「……」

そう、ムラクモがノアから取り出したのは昨日の朝倒したワイバーンの首である。なにより説得力のある証拠を見せられ、何も言えなくなっていた者達は更に何も言えず、開いた口が塞がらない状況になっていた。

「ハッ！　き、貴様！　そのワイバーンを貴様が倒したと言う確たる証拠はあるのか！？」

いち早く現実に戻ってきた金髪男がムラクモを指で指しながらそう声を張り上げた。

（人を指さすなって教わらなかったのか？）

と思いながら、ムラクモはまたノアに手を突っ込み、ワイバーンの斬り刻んだ体を次々と出していった。倒した証拠は無いが、そんなことは本人にとってはどうでも良いことである。

「ハッ！　あなたね！　これを見ても……うわ！　なんかいっぱい出てる！」

次に戻ってきたキャシーは、目の前にあるワイバーンの首に加え、翼や脚などが追加されていることに驚いた。

「ふん！　では、お前はこの男がワイバーンを倒す瞬間を見たと言うのか？」

「ぐ……それは」

（はあ。俺じゃなくてキャシーに絡むとか……面倒だな）

そう思ったムラクモは席を立ちキャシーの前に出た。金髪の男を面倒くさそうに見て、その後キャシーの方を向きあることを言った。

「なんだ？　そいつは何を言っている？」

傍から見れば、ムラクモは声を出さずに口だけを動かしていると言う変な人間として映っている。事情を知らなければそうなって当然だが……。

「『お前と俺が戦って、俺が勝てば認めるか？』だって。あ、今のはわたしじゃなくて、ムラクモが言ったことだから」

面倒になったムラクモは手っ取り早く証明するにはその方法が一番だろうと思い、そう提案し、キャシーは誤解されないようにそう付け加えた。

それを聞いた金髪の男は何か可笑しいのか、初めは声を押し殺して笑っていたがやがて押さえきれなくなったのか大声を上げて笑い始めた。

「ハハハハハハ！　面白いな！　いいぞ、その勝負受けてやろう！」

そしてムラクモの提案を承諾した。

「ムラクモ、大丈夫なの？　あいつ、結構強いわよ？」
『別に良いって。俺は勝つつもりも負けるつもりもねえから』
「え？　じゃあ、なんでこんな提案したの？」
『あのままだとお前に矛先が向いてただろうな……と思ってな』
「え？　わたしの為？」

『ま、結果的にそうなるのかね？　悪かったな？』と、ムラクモはそう言ってキャシーの頭に手を乗せ、キャシーは顔を赤くした。

その後、ギルド裏庭にてムラクモＶＳ金髪男の勝負が行われることになり、誰が言い出したのか、「どちらが勝つかを賭ける」者達が出てきた。更にこういった話が広まるのは早い物で、聞きつけた民間人や休憩中の職人などもギルドの裏庭に来ていた。

「ムラクモ、あいつランクＢですって。やっぱり結構強いわ」
『関係無いって言ったろ？　ていうか、お前ここにいるとまたこんなことに巻き込まれるかも知れねえぞ？』

ムラクモが勝負をしようと言い出したのは、先程の理由もあるが、もう一つはキャシーをこの場から逃がすこともあった。それは本人によって難無く崩されてしまったが……。

「いいの。原因はわたしなんだから、これが終わるまではいる」

意思は堅いようで、言葉の通りこの騒ぎが終わるまでは、この場から離れるつもりは無いようだ。

「それで、どう戦うの？　人相手に戦ったことなんて、無いわよね？」
『確かにねえけど、槍なら使ったことはあるから間合いくらい分かってるよ。ほら、危ねえから下がってろ』
「……分かった。負けないで！」
『おう』

二人は拳を合わせた。

その後、右手をさすっているキャシーが見受けられたとかなんと

か。

「準備はいいか？」

頷いたムラクモを見て、金髪男は全体が細い槍を構えた。それを見たムラクモも腰を落とし拳を握る。

「オレ相手に素手で戦うつもりか？」

『そうですがなにか？』

「なぜ声を出さないのかは分からぬが、後で後悔するなよ！」

金髪男のその言葉から、二人の戦いは始まった。

十分な力を込めた踏み込みで一気にムラクモとの距離を詰めた金髪男は常人では躱せない速度で槍を突き出した。

（Ｂってことは……ＥＸの下の下？　ん？　ＥＸの下ってＡか？　後で聞こう）

そんなことを考えながら、ムラクモは槍を軽くいなし同時に金髪男の足に右足をかけた、一歩下がって再度拳を構えた。金髪男も流石高ランク者と言うべきか、これ位で倒れることはなく、見事に体を捻り体勢を整えた。

次いで金髪男は連続で突きを繰り出すが、ムラクモはそれらを全て最小限の動きで躱していた。

（ランクＢってのは、こんなもんなのか？　それともコイツが弱いだけか？）

躱しながらムラクモはそんなことを考えていた。

（それに、さっきから妙な視線を感じるが……）

戦闘が始まる前から、ムラクモは視線を感じていた。もちろん今はこの場にいる全ての人間がムラクモと金髪男を見ているが、それらの視線とは違い、探るような視線である。

（なんか寒気がする）

同時に悪寒にも襲われていた。

「チィ！　ちょこまかと動きおって！」

次第に焦りが生まれたのか、金髪男の槍の動きが最初に比べて鈍くなっていることをムラクモは確認した。

（そろそろ終わらせるか）

そこでムラクモは攻勢に移ることにし、その後勝負は一瞬にして着いた。

「ハアッ！」

裂昂の気合いを込め放たれた突きをムラクモは右半身をずらして躱し、槍に向かって真上から垂直に左手手刀を落とした。

「な……」

バキンと良い音を立て、中央から綺麗に折れた槍を見た金髪男は言葉を無くし、呆然とその場に立ち尽くしていた。周りの者も何も言えず、場を静寂が支配した。

「やったー！」

そんな中で、キャシーがそう叫び、ムラクモに向かって突撃した。

そう、文字通り「突撃」した。

（ゴハッ！）

鳩尾に渾身の一撃をお見舞いされたムラクモはその場に倒れた。

「え！？　ちょ、ムラクモ！　ムラクモしっかりして！　一体誰にやられたの！？」

お前だよ、とその場にいる全員がつっこまずにはいられなかった。

「ムラクモお！　しっかりしてえ！」

その後、ガクガクと揺さぶられたことにより、かろうじて保たれ

ていたムラクモの意識は完全に断たれた。

「おもしろい」

そう言ったのは、ギルドの屋根からムラクモを見ていた少女である。

黒い瞳を持ち、ムラクモに負けず劣らずの黒髪を胸元で結んでおり、背中には身の丈程の長さを持つ、＜大太刀・ドラゴンキラー＞を携えている。

黒い革製の服で上下を揃えており、下は動きやすさを重視している為か相当短く、太ももの真ん中辺りまでしかない。

少女はもう一度ムラクモを見た後、屋根から姿を消した。

「たのしくなりそう」

最後にそう一言残して――。

第六話・ムラクモＶＳ金髪男（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

第七話・次なる目的地

ギルド内の医務室に運ばれたムラクモは何か寒気を感じ目を覚まし、同時に腹部の痛みが蘇り、キャシーの思いがけない威力の攻撃を思い出した。

（強力過ぎるだろ、あれは……）

と心の中で愚痴っていると、扉が開きキャシーが入室してきた。

「あ、起きた？　貴方、戦いが終わった後気絶したのよ？」

（トドメはお前だったけどな……）

ムラクモはそう思ったが、口を動かすとまた面倒が起こりそうだったので思うだけに留めた。

持ってきた水と水差しをベッド近くの棚に置き、キャシーはベッドに腰掛けた。

（小せえ体だな……。そういや、なんでこいつは旅してんだ？）

そんな疑問がムラクモの頭には浮かんだが、本人が話そうとしないなら無理に聞いてもしょうがないだろうと思いこれも思うだけに留めた。

「……」

『……』

ただでさえムラクモは話すことが出来ない、そんな状況で二人きりになり、その一方が何も話さなければ必然的に場を沈黙が支配することになる。今度は、道中の様にムラクモは何かを考えている風は無い。

無いが代わりに、

（じゃんけん、ほい！　うし！　勝った！）

じゃんけんをしていた。

（んじゃ、今度は六人でやるぞ？）

その意思に従い、ノアは体を六つに分けそれぞれが拳を握った。

（じゃんけん、ほい！　あいこ、で、しょ！）

ムラクモの意思に従って動いてるんだから必ずムラクモが勝つんじゃないか？と言う疑問を抱いた者もいるかも知れないが、ノアが自分から消えたり現れたりすることもあると言ったことを覚えているだろうか？

つまり、今の様にじゃんけんや何かで勝負をする時は、ノアは自分の意思で動いている為どこにもおかしな所は無いのである。

（七人でやると中々終わらねえな。次であいこだったら、じゃんけんは終わりな？じゃ～んけ～ん……ポン！　ぐあ、負けた！）

「……何してるの？」

『ちょっとな、ノアとじゃんけんを。頼むからそんな目で見ないで

くれるか？』

何故かベッドが揺れていることに疑問を持ったキャシーが後を見ると、そこではムラクモがノアと何かをしておりその時の動きでベッドが揺れていた訳だが……キャシーはそんなムラクモをジト目で見ていた。

「まあ、いいけど。これからのことだけど、わたしは少し資金を貯めたら街を出るわ。出来るだけ急いで王国から離れたいし……貴方はどうするの？」

『少し依頼を受けたら出る』

「そうなんだ……あ、あとこれ」

『ん？　何だ？』

立ち上がったキャシーはバッグから袋を取り出しムラクモに差し出した。流れで受け取り、中を確認するとムラクモは驚愕に目を見開いた。

中に大量のギールが入っていたからである。

「ワイバーンの首とか脚とか翼とかね……ギルドの人に本物だってことを確認してもらって、その場で換金してもらったの。角とかは、武器屋さんに持って行けば武器に加工してもらえるって言うから、一応貰ってきたわ」

そう言って今度は角を取り出すキャシー。だが、ワイバーンの角はキャシーが両手で持たなければいけない程の大きさを持っており、その体はふらついていた。

その結果、

「にゃっ！」

ベッドに躓きムラクモの上に倒れるのは当然と言えるだろう。

「あ、ごめん……」

素直に謝るキャシーの頭を、ムラクモはまた撫でた。

「あぅ……」

流石にキャシーも恥ずかしいのか、顔を紅潮させながらムラクモを上目遣いで見た。

なんだかんだで、この二人は相性が良いのだろう。

二人で過ごす時間を、どこかで心地よく思っている。

『とりあえずだな、この金はお前が持って行け。あ、やっぱ駄目だ。その辺の奴に狙われるかも』

差し出した袋をすぐに引っ込めたムラクモを見て、キャシーは暫く無言になったが、

「ねえ……わたしと一緒に旅しない？」

やがて、ポツリとそう言った。

『は？　なんだ、いきなり？』
「いや、その……なんていうかね？　貴方とは会ったばかりだけど、不思議と一緒にいるのが楽しくて……それに、そのお金も、わたしが持ってるのが危ないなら、貴方が一緒にいれば取られる心配も無いでしょ？」

ムラクモの疑問にキャシーはたった今思いついた考えを述べる。

『ああ、成る程。そうだな。じゃ、一緒に行くか』
「え？　ホントに良いの？」
『ああ』

まさか、こんなにあっさり承諾してくれると思っていなかったキャシーは純粋に驚いた。

『それで、次はどこを目指すんだ？』
「……あ……道なりに、＜ディロウア＞に行こうと思ってる。武器職人、剣士、魔術師とか色んな人が集まってて、年に五回、街挙げての大会が開かれるの」
『随分と血気盛んな街だな。それで？　すぐに出発するか？』

理由は分からないが、キャシーが何か急いでいることは先程の台詞からも分かっているムラクモはそう問いかけたが、キャシーは、「そんなに急がなくてもいい」と首を横に振り言った。

「武器屋さん行こう？　角の加工とか、して貰いたいし」
『そうか。で、それはいいが、早く起きてくれるか？　その角結構重いんだよ』
「あ、ごめん」

この会話中もキャシーは倒れたままであった為、角がずっと足に押しつけられていて地味な痛さをムラクモは感じていた。言われてやっとそのことに気付き、キャシーは体を起こして角をバッグにしまった。

ベッドから出たムラクモは体を解し、水を一杯飲み、その後医務室を出てギルド内の者達の視線を浴びながらも気にすることなく外に出た。

『武器屋はどこにあるんだ？』

「そこ」

ぴっ、とキャシーが指さしたのはギルドの二つ隣の建物。

その動作を見たムラクモは何故か和んだ。

（可愛い奴だ）

早速店に向けて歩き始めた二人。

ムラクモは先程金髪男と戦っていた時に感じた視線をまた感じたが、場所は掴んでいる為無視することにした。その内痺れを切らして出てくるだろうと考えたからだ。

そのまま、キャシーは何も気付かず、ムラクモは無視を決め込み、

武器屋へと入っていった。

第七話・次なる目的地（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

第八話・ムラクモVS漆黒の少女

さて、ムラクモを見ていた少女だが、少女は気付かれていることに気付いていた。そんな状況を少女は楽しんでいる。

いや、

「ハァア……」

悶えている。

悩ましげな吐息を吐き、頬を赤らめ自分の体を抱きしめ、くねくねと動かす少女は色々な意味で目立っているが、少女は何も気にしている様子はなく、ムラクモが次はどんな対応を取るのか楽しみにしていた。

少女が何故さっき見たばかりで一言も話していないムラクモにここまで興味を持っているのかと言うと、それはムラクモの力にある。知っての通り、ムラクモの力であるノアは、意思に従ってその形を様々な物に変えることが出来る。

先の戦闘でその力をムラクモは使っていなかったが、この少女は少々特別であるため、その力を感じ取ることが出来た。

「早く出てこないかしら？」

そんなムラクモを待つ少女に近づく男が二人。

「なあ、そこの姉ちゃん」
「ちいと、僕たちに付き合ってくれない？　すぐに終わるからさ」
「遅いわね……何してるのかしら？」

しかし、少女の耳にはまるで入っていないらしい。見事なまでに二人を無視している。そうされると当然、人としては良い気分はしない。

「おい、聞いてんのか？」
「私も行く？　いやいや、待ってるからこそ良いのよ。あ～、でも早く見たい」

少女は完全に自分の世界に入っている様で、まるで聞いていない。自分たちが完全に無視されていることに男二人は余程気が短いのかすぐに切れ少女の手を掴もうとしたが、

『――――――――――――――――――――――――――――』
「そうね。この後どうする？　何か依頼でも受けてみる？」

そこで少女の待ち人が武器屋から出てきた。

（今、何を言ったの？　彼）

少女には、ムラクモが只口を動かした様にしか写っていないが、隣にいるキャシーは、なんと言ったか分かるように言葉を返している。そのことに疑問を感じていると、ムラクモが少女の方を一瞬チラリと見て、何か面倒くさそうな顔をしたのを少女も見た。

その後、ムラクモはキャシーに何か言うと少女の方へと向かってきた。

（あら、もう終わり？　ん？　後ろ？）

ムラクモは少女に近づきながら、「後ろを見ろ」と言う様に指指した。それに従い後ろを見た少女は、そこで漸く男二人の存在に気付いた。

（どこに行っても変わらないのね？）

少女は自分に手を伸ばそうとしている男を見て心底嫌そうな顔をした。少女は正しく絶世の美女と言っても過言では無い美しさを持っており、そんな少女が街を歩いていれば、邪な考えを浮かべる者は当然出てくる。これまでに何度も、少女はその経験をしてきた。だからうんざりしているのである。

「あ？　なんだ、その目？」

「生意気な奴だな」

「はあ……」

溜息を付いた少女は背中の大太刀に手を掛、引き抜くと同時に男達を斬ろうとしたが、

「っ」

それは他でもないムラクモによって止められた。

「なに？」

『……』

「なんだ、テメエ？」

ムラクモは何も言わずノアを出現させ、少女の前に文字列を作り、少女はそれを読んだ。

「『こんな所で流血沙汰を起こすな』？　どうして貴方にそんなこと言われないといけないのかしら？　私がどこで何をしようと勝手よ？」

（「目の前で人を殺そうとしている奴がいたら、普通は止めると思うぞ？」）

「お「だからなに？　言ったでしょ？　『どこで何をしようと私の勝手』だって」

完全に無視されている男の一人が何か言おうとしたが、少女の言葉によって遮られ、しかもそれは男では無くムラクモに向けての発言だった。

（「確かにそうだな。なら、今回は運が悪かったってことで見逃してやってくれ」）

「『運が悪かった』……ね。じゃあ、代わりに貴方が相手してくれない？　一度抜きそうになった所を止められて、こっちはスッキリしないの。それに――」

少女はそこで言葉を区切り、背中の大太刀を一気に抜くと同時にムラクモに斬り掛かった。

それを、ムラクモはバックステップで躱すと同時に刀を取った。

抜刀が速すぎた為か、後ろにいた男の前髪がバッサリと切られ、触れてもいないのに切られたことに恐怖したのか、二人は顔を真っ

青にして退散していった。

どうでもいいことだが……。

「貴方には興味があるの。その力、見せて頂戴？」

「ムラクモ！　大丈夫！？」

『――』

様子を見ていたキャシーは、少女が抜刀した所でムラクモの危険を感じ、駆け寄って来た。

「貴方、さっきも、今みたいに声を出さずに喋っていたわね？　どうして声を出さないの？」

（「『出さない』んじゃなくて、『出せない』の。ま、原因は分からんが、声が出なくなってな……と、んなことはどうでもいいな。さて、始めようぜ？」）

「（声が出せなくなる？　精神的なショックか何かが原因かしら？）そうね。でも、その前聞きたいことがあるのだけど、いい？」

少女は自分なりに声が出せなくなる原因を考え、そのことについて何か心当たりがあるのかムラクモに質問することにした。

（「なんだ？」）

「声が出せなくなったのは、いつから？　それと、その時何かショッキングなことが起きたりした？」

（「声が出なくなったのは十年前。ショッキングなことっつったら、目の前で親父とお袋が殺されたことかな？　それがどうかしたか？」）

後ろで見ているキャシーは、ムラクモの体に隠れていることもありその文字を読むことは出来なかったが、今はそれで良かったのかも知れない。

「『どうかしたか？』って……まあ、いいわ。誰に殺されたのか、それも教えてもらえるかしら？　もちろん無理にとは言わないわ」

少女は初対面の人間にそこまで教えないだろうと思いながらも聞いたが、ムラクモはあっさり、「魔物だよ」と答えた。

「魔物？」

多少驚きながら、少女は復唱する。

（「そ。夜、いきなり魔物が押し寄せてきてな？　そいつらにガブリと。俺はノアのおかげで生き残ることが出来たんだよ」）

「……」

（「どうした？」）

急に黙った少女にムラクモは問いかけた。だが、下を向いているのでその文字列は見えていない。

ムラクモもキャシーも、黙り込む少女を暫く何もせず見ていた。

やがて少女は顔を上げた。

「いいわ。始めましょう」

そして、大太刀・ドラゴンキラーを構えた。

ムラクモはキャシーに下がる様に言い、ノアを構えた。

お互いの準備が整ったことを確認した二人は、示し合わせたかの様に同時に踏み込み、中央でぶつかり合った。甲高い音が辺りに響き、それによって周りの者は二人に注目し始め、その中には先程のムラクモの戦いを見ている者もいた。

瞬く間にその者等の口から広がっていき、野次馬は湧くようにどこからとも無く現れ、終いには街の殆どの人間がギルド前に集まってしまった。

「ちょ！　どいて！　見えない！」

その人波に、小柄なキャシーはあっさり飲み込まれてしまい、ムラクモと少女の姿はすぐに見えなくなってしまった。

「フッ！　ハアッ！」

牙突から勢いを利用した回転斬りを放ち、それをどちらも躱したムラクモは一気に少女の懐に入り込み下からの斬り上げを繰り出した。顔を真上に向けて躱した少女は、そのまま体を後ろに回転させながら蹴りを放ち、ムラクモは顔を右に逸らして躱した。

綺麗にバク転をした少女は、右足が地に着くと同時に大太刀を構え、前傾姿勢のまま力強く地を蹴った。急接近した少女は横凪に一閃し、ムラクモは屈んで躱したが、少女は空中にも関わらず、また

勢いを利用した回転から一撃を繰り出した。

ノアで防御したムラクモは、右手を堅く握り立ち上がる勢いをそのままに少女の鳩尾に向けて拳を放ったが、

「甘いわよ！」

大太刀から手を離し、少女はそれを受け止めた。

だが、完全に威力を殺すことは出来なかったのか、受け止めた瞬間痛みに顔を顰めた。

二人の戦いはそこから一時肉弾戦に移行した。

ムラクモはノアを使えば問題無いのだが、当たってしまえば間違いなく殺してしまうことは分かっている為、今は引っ込ませている。

至近距離での拳の繰り出し合いの中、一瞬の隙をお互い見つけられず大きな動きは出来ずにいるが、拳を繰り出す早さはどちらも尋常では無く、その動きを目で追うことが出来る者はこの場には二人を除いて存在していない。

「貴方、戦闘経験はどれくらいなの？」

（「十年位だよ」）

今はノアを出す余裕を持っている様で、ムラクモは動きを止めず文字列を作った。

器用な人間である。

「対人戦は？」
（「お前が二人目。そんなこと聞いてどうするんだ？」）
「いえ、なんとなく、よ！」

話している間に優勢に運ぼうとしたのかどうかは分からないが、少女は拳を屈んで避けながらムラクモに足払いをかけた。躱されることが分かっていた少女は、その隙に地面に刺したままにしていた大太刀を取り、距離を取る。そしてギルドの屋根に飛び移った。

「場所を変えましょう！　人が多すぎて動きにくいわ！」

そう言うや否や、少女は街の南口に向かって屋根伝いに走って行き、すぐに見えなくなった。かなりの速さで走っている様だ。

（あれだけ動いておいてよく言うよ）

心の中で悪態をついたムラクモは、自分の後ろに出来ている人だかりに突っ込み、

「あ、ムラクモ！　って、きゃっ！」

キャシーを抱きかかえて屋根に跳び少女の後を追った。

『舌噛むからな。追いつくまでは喋らない方が良いぜ』

キャシーはおとなしく頷いた。

「この辺で良いかしらね」
街を出た後も少女は止まることなく走り続け、やがて街道と森以外何もない平原に出た所で止まり振り向いた。
『大丈夫だったか？』
「……うん」
お姫様抱っこが恥ずかしかったのか、やや間を置いて答えたキャシーを降ろし、ムラクモは再度ノアを出現させると、少女を見据える。言われることが分かっていたキャシーは、戦いの邪魔にならないようにムラクモから十分な距離を取った。
「ハッ！」
「はやっ――」
キャシーが離れたことを戦闘準備が整ったと解釈した少女は、十メートルはあった距離を一足飛びで詰め、先程までとは比べものにならない速さで大太刀を下から振り上げ、その余りの速さに、キャシーは驚きを隠せなかったが、ムラクモは慌てることなく綺麗に躱し、結果一瞬前までムラクモが立っていた場所から数十メートル後方まで大きな傷痕が残った。
相手がやっと本気を出したことにムラクモも気分が昂まり、少女の追撃が来る前に刀を振り下ろした。
「ッ！」
それを見た少女は、「殺される」と言う明確な未来が視え、生物

的本能に従い大太刀を離し一気に距離を取った。荒くなった息を整えながら、体中に嫌な汗を掻いていることを実感しつつ瞬きを忘れムラクモを見ている。

（何よ、今の……心臓を直接握られた様な……嫌な感覚は？）

目の前に突き刺さっている大太刀を取ったムラクモは、それを少女の近くに向けて放り投げ、見事少女の目の前に刺さった。それを抜き少女はまた構えるが、まだ恐怖が残っておりその手は震え、大太刀はカタカタと音を鳴らしている。

たった一回の、それもほんの少しの本気の一撃に込められた殺気を受けた少女はすっかり萎縮してしまい、さっきまで威勢はどこへやらと言った感じで、その場から一歩も動けずにいる。

遠目から見ていたキャシーも、少女の様子がおかしいことに気付き、一度ムラクモを見たが、当のムラクモは未だ刀を構えていることからこのまま続行することが分かり、結局何も言えないままだった。

少しして、次はムラクモが先に動きゆっくりと一歩ずつ少女に向かって歩き始めた。

「ぁ……」

恐怖の余りか、まともに声を出すことも出来ず少女はただただ怯えその場に立ち尽くしていた。

一歩一歩確実に近づいてくるムラクモに、恐怖心は膨らんでいき、やがて手の震えは腕を伝って上半身に、そこから更に下半身に伝い、

結果少女の体はガクガクと揺れ始めた。何も出来ず、近づいてくるムラクモを眺め、遂にムラクモは少女との間合いを拳一つ分程までに詰めた。

大太刀を右手で退かし、少女の目を正面から見据えるムラクモに、少女はまた怯える。

この距離ならば、例えたった今剣を握った者でも外すことはない。

目の前の人間がそんなヘマをしないことを、さっきまで戦っていた少女はよく理解している。

そして、ムラクモはゆっくりと刀を握っている左手を上げた。

「あ……ああ……」

――――殺される

そう確信した少女は堅く目を瞑り、その瞳から涙を流した。

「――――え？」

だが、少女の体に刀が振り下ろされることは無く、代わりに感じたのは頭にポンと軽く何かが乗せられる感覚。

おそるおそる目を開くと、目の前には穏やかな笑みを浮かべたムラクモがおり、刀が握られていた左手は少女の頭に伸びている。

そのことに、少女は自分でも分からないがひどく安心し、ペタリと座り込んで声を上げながら泣いた。

ムラクモもそのまま腰を下ろし、泣きじゃくる少女の頭をそっと撫でる。

その様子を見ていたキャシーは、戦いが終わったことを理解し走ってムラクモの元に向かい、隣に腰を下ろす。それを確認したムラクモは、少女に伝えたいことをキャシーに伝えて貰った。

「『殺される。そう思った時お前は怖かっただろう？　お前が今まで人を殺したことがあるのかは知らねえけど、殺したとしたら、そいつらも同じ気持ちを味わったんだぞ？　だからな、これからは人相手に剣を抜くことは余りするな。抜く時は自分も殺される覚悟を持て』、だってさ」

未だ泣きじゃくっている少女にその言葉がどこまで通じたのか二人には分からなかったが、とりあえず泣きやむまでは一緒にいることにした。

第八話・ムラクモＶＳ漆黒の少女（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

第九話・出来る者の感覚、出来ない者の感覚

『まさかそのまま寝るとはな……』
「戦闘の疲れ、っていうよりは、泣き疲れたのかも知れないね？見た目より、成長してる訳じゃないのかな？」

あの後、暫く待っていた二人だが、突然少女が静かになったことに疑問を持ち見ると少女は眠ってしまっていた。結果、大太刀を落下防止に背負い、その背中で少女はすやすやと寝息を立てており、今はレークナへの道をゆっくりと歩いている。

『ま、コイツよりもお前の方が年は下だろうけどな？』
「それとこれとは関係ないもん……そういえば、わたし何歳か言ったっけ？」
『言ってないな』
「十四歳」
『おお。当たってたか』
「え？　分かってたの？」
『十四～五辺りかな、とは思ってた。あ、そういや、ＥＸの下って何だ？』

その質問に一瞬首を傾げたキャシーだが、すぐにギルドのことと分かり、「ＳＳＳ（トリプルエス）」と答えた。そして、「その下に、『ＳＳ（ダブルエス）』『Ｓ』『Ａ～Ｇ』まであるの」と、そう付け加えた。

『てことは、あの金髪は結構強かったんだな？』
「だからそう言ったでしょ？　まあ、確かにムラクモが最初から最

後まで圧倒的だったけど……その衣装にすら掠ってなかったし」

キャシーのその言葉を聞いたムラクモは、感心した。

恐らく、あの場にいた殆どの人間がムラクモか金髪男の動きに夢中になっていたであろう中で、そこまで細かく見ることは余り出来ないだろう。だが、キャシーはしっかりと見ていた。

（その目はいつか武器になるかもな……）

ムラクモはキャシーの成長が楽しみになった。

尤も、そんなに長く一緒にいるかどうかなど分からないが。

レークナへと戻ってきたムラクモ達だが、少女は未だに眠っており、仕方なくそのまま宿に向かった。空いていた大部屋を取り、ベッドに寝かせ、二人もそれぞれベッドに腰掛ける。

「中々起きないわね？　この娘」

『まあ、いいんじゃねえか？　俺達も、明日まではいる訳だしな』

「……」

『どうした？』

急に黙り込んだキャシーにムラクモは問いかけ、キャシーは気になったことをムラクモに聞いた。

「ムラクモはさ、どうして会ったばかりの人に、自分のことを教えられるの？」

少女が戦う前に尋ねたことにも、始まりの森を抜けた後、キャシーに尋ねられたことにも、渋ることなくあっさりと答えた。ムラクモと出会い、まだ一日も経っていないが、冷静になって考えてみれば、聞かれたからと言って誰でも自分のことを教えてくれる訳では無い。

キャシー自身、素性は聞かれた所でおいそれと教える訳にはいかないのだから、尚更にそう思っている。

『？　別に理由はねえよ。聞かれたから答えただけだ』

だが、ムラクモから返ってきた答えは、そんな単純な物だった。

「じゃあさ……ムラクモの質問にわたしが答えなかったどうする？」
『答えたくないなら答えなくていいだろ？　どうしたんだ？』
「……ううん。何でもない」
『そうか？　ならいいが』
「あはは……それで、この娘が目を覚ましたらどうするの？」
『別にどうもしねえよ。何をしようとコイツの自由だ。結果何が起きようとな』

一見冷たく聞こえるかも知れないが、少女自身がそう言ったことを知っているキャシーは納得した。

陽が沈み、外が完全な闇に包まれた頃、少女は漸く目を覚ました。

「……ここ……は？」

上体を起こし辺りを確認した少女は、今自分がいるここが宿だと言うことを起き抜けの頭でなんとか理解したが、そうすると次は何故自分がここにいるのか、という疑問が浮かんでくる。

それを考えている時、足音が聞こえた少女は一気に意識が覚醒し側にあった大太刀を抜いた。

「――さまガルムがあんなに美味しくなるなん……」

「ハッ！」

「ヒッ！」

扉が開くと同時に天井を削りながら大太刀を振り下ろした少女だが、その剣はキャシーの後ろにいたムラクモによって簡単に止められた。

「あわわわわ」

余程怖かった様で、キャシーはムラクモに抱きつきガタガタと震えていた。

「貴方たち」

（「よ。元気そうで何よりだ。とりあえず刀をしまってくれ」）

「あ、ええ。ごめんなさい」

言われた通り刀をしまった少女を確認し、ムラクモはキャシーの背を押しながら部屋に入り扉を閉めた。

「それで、どうして私はここにいるの？」

（「眠ったお前を運んできたからだよ。顔、洗ってきたらどうだ？

目が赤いぞ？」）

「え？」

言われて少女は、目元に手を持って行き触れた所が少しヒリヒリすることを感じた。

「私……泣いたのね」

そう独り言を呟いて、少女は洗面台のある浴場へ向かった。

（泣いたことがないみたいな言い方だったな……ま、いいか）

そう考えながら、ムラクモはキャシーの頭に手を置き、

「うう……怖かったぁ～」

ポンポンと、優しく叩いた。

「酷い顔」

姿写しに写った自分の顔を見て、少女はそう呟き、もう一度冷水を顔に浴びせた。

「ふう。さて、これからどうしようかしらね」

幾分スッキリした頭でこれからのことを少女は考える。だが、特段考える必要も無く、少女はどこか適当な所に行くことを決めていた。

（今までずっとそうしていたんだから、これからも何も変わらない）

備えられている布を使い、顔を拭いた少女はムラクモ達の所に戻った。

（「お前、これからどうするんだ？」）

「どうもしないわよ。今まで通り、気の向くままに旅を続けるわ」

「ずっとそうしてきたの？」

「ええ。十年前からね。＜マクトウェイ大陸＞から、道に沿って歩いていたら、ここに辿り着いたの」

「へ～……」

戻ってきた少女は、ベッドに腰掛け、何故か同じベッドで並んで座っている二人と会話をしている。その二人の内の一人、ムラクモに聞かれ答えた少女にキャシーがそう聞き、特に隠す必要も無いと思った少女はまた答える。

その話に、キャシーは殆ど外に出られなかったこともあり、大きな興味を示した。

「何か面白い所とかあった？」

「これと言って、そんな所は無かったわ。それに、あったとしても十年前の＜終焉戦争＞で破壊されてたりする所が多いと思うわよ？」
「そっか……残念だな」
（「終焉戦争ってなんだ？」）
「「は？」」

聞き慣れない単語が聞こえた所で疑問の声を上げたムラクモに、二人は「コイツ何言ってんだ」と言う様な視線をぶつけた。

「終焉戦争のこと、知らないの？」
『ああ』
「十年前に起こった人と魔物の戦争よ？　歴史にも刻まれてるのに」
『んなこと言われてもな……ずっとハイス村にいたんだから仕方ねえだろ？』
「あ、それもそっか……じゃあ、簡単に説明するけど、いい？」
『ああ』
「ちょっと待って」
「――え？」

まさに説明しようとしていたキャシーは突然止められ少女を見た。ムラクモも少女を見る。

「貴女は彼の言っていることが分かるみたいだけど、私は口を動かしているようにしか見えないの。今彼はなんと言ったの？」
「あ、そっか。えっとね？　『終焉戦争のことを、ずっと故郷にいて知らないから教えてくれ』って」
「成る程ね……それで、どうして貴女は彼の言っていることが分かるの？　声は出ないのよね？」

ムラクモは一つ頷いた。

「読唇術だよ。口の動きで、ムラクモが何を言ってるか分かるから、わたしはそれに返してるの」
「貴女……それがどれだけ難しいことか分かってるの？」
こともなげに言うキャシーに、少女は呆れたように言った。
「え？　そんなに難しくないよ？　やってみると結構簡単だし。貴女も……そういえば、貴女、名前なんて言うの？」
今更？　二人は同時にそう思ったが、言うのも面倒だと思ったので言わなかった。
一つ溜息を付き、
「メルシアよ」
少女はそう名乗った。
「わたしはキャシー。よろしくね？　それで、メルシアもやってみる？」
「やるって……読唇術？」
「うん」
少女二人が話し始め、暇になったムラクモはベッドに寝転がり、またノアとじゃんけんをして遊んでいた。

「（まあ、暇潰しにはなるかしらね）ええ、やってみるわ」
「それじゃ、わたしが何か言ってみるからそれを当ててみて？」
「ええ」
（終焉戦争のことはどこに行ったんだろうな？　まあ、いいが。さて、五回連続で勝った奴が勝ちだからな？　気張って行くぞ？　じゃんけん！　ポン！　あっ、くそ！）
「（ムラクモ）」
「『すあきゃ』？」

全く違う新たな言葉が生まれた。

ムラクモはそれを聞いた途端、吹き出しそうになったがなんとかこらえじゃんけんを続行した。

「（いや）」
「『びゃあ』」
「（かぜ）」
「『まえ』？」

やはり中々難しい様で、その後一時間程掛けてやっと正解したのが、

「『ムラクモ』？」
「あ、正解」

その言葉だった。

途中、ムラクモは笑いすぎたことで引きつけを起こし、これ以上

部屋にいると笑い死にすると思い外に出た。

「やったね。じゃ、次行くよ？」

「ええ」

「（キャシー）」

「『きゃー』？」

「悲鳴じゃ無いんだから……。次ね、（ノア）」

「……『もあ』？」

「惜しい」

「ふう……やっぱり難しいわね。貴女、どうしてこんなことが出来る様になったの？」

「え？　なんとなく、『出来るかな～』って思ってやってみたら出来た」

「……」

果たしてそんな簡単にできて良い物だろうか、とメルシアは疑問を感じずにはいられなかったが、あまり細かいことは気にしないことに決め、その後も読唇術の練習に励んだ。

（「終焉戦争」、ねえ……確かにハイス村は、名の通り終焉を迎えた訳だが……まあ、いいか。今更気にした所で何が変わる訳でもねえし）

宿の外に出ていたムラクモはそんなことを思いながら空を見上げた。

ハイス村では、上空に遮る物など存在せず煌めく星々を眺めることが出来たが、レークナは建物が建ち並んでいて見える空の範囲が限られている。そのことに不満を感じたムラクモは屋根の上から見ることにして、宿の屋根に跳んだ。

（やっぱ空ってのはどこで見ても綺麗だな……）

組んだ手を頭の下に回し、寝そべって空を見上げるムラクモ。

陽が既に落ちているからなのか、人の姿は殆ど見当たらない。

（いたら怪しいとは思うが。そういや、角の加工終わってんのかな？）

金髪男と戦った後、ムラクモとキャシーの二人はワイバーンの角を加工して貰う為武器屋へと赴き、店主に見せた所、「明日まで掛かる」と言われ、明日まではここレークナに滞在することを余儀なくされたが、もしかしたらもう終わっているのではないかと思い、行ってみることにした。

屋根を伝いながら武器屋の屋根まで行って下に降り、灯りが点いていることを確認したムラクモは中に入った。

「ん？　おお、朝の兄ちゃんか。丁度良かった、さっき角の加工が終わってな……持ってくるから少し待ってろ」

白髪に眼鏡を付け、作業着を着た人の良さそうなおじさんは、ムラクモを見るとそれだけで用件を理解し、そう言って奥へと消えた。

戻ってくるまでの数分、改めて中を見回したムラクモはどの武器

も優れていることに感心していた。
武器に詳しいという訳では無いが、どの武器にも何かしらの想いが込められていることが分かる。
（中々いねえだろうな……ここまで一つのことに打ち込める奴ってのは）
「待たせたな」
そう思っていると、おじさんが戻ってきた。持っている小さな木箱の蓋は開けられており、中には刀身の青い短刀と、黒に黄色い紋様が入った鞘が入っている。
（角ってあんな色じゃ無かったけどな……）
「ワイバーンの角はな、熱すると青くなるんだ。どんな原理かは分からんがな。名前は『スカイブルー』と付けたが、良かったか？」
角を持ってきた時に代金を払っていたムラクモは、頷きながら鞘と短刀受け取り、感謝の意を込め頭を下げた。
「……声が出ないということは、この先苦労することが多いだろうが、一人じゃないんだからな……仲間には頼って良いんだ。まだまだ先は長い、思う存分楽しめよ？」
そして、頭を上げたムラクモにおじさんは拳を突き出した。
ムラクモも拳を突き出し、ゴツンと痛そうな音を響かせながら互いの拳をぶつけた。

腰の帯に、スカイブルーを差し、「そろそろ練習も終わっているだろう」と思いながらムラクモは宿に戻ったが、部屋の前に来た時に、「しぇい？」、とメルシアの意味不明な単語が聞こえ、まだ練習をしていることが分かった。

メルシアは暇潰しのつもりが、かなり夢中になっている様だ。

出来るだけ邪魔にならないように、扉をそっと開き中に入ると、何か言おうとしていたキャシーが動きを止め、ムラクモの名を呼んだ。それにより、メルシアも気付いたが、その目はまるで、「邪魔するな」とでも言っている様だ。

「邪魔しないでちょうだい」

というか実際に言っていた。

『悪いな』
「『まぶいわ』？」
「惜しい！」
（そうか？）

この短時間の間に癖になってしまったのか、メルシアはムラクモの口の動きを見て言った。ムラクモもそれを分かって、ノアでは無く口を使ったのだが。

「あら？　腰の帯に差してるそれ、どうしたの？」
「あ、ホントだ。拾ったの？」
『んな訳ねえだろ……ワイバーンの角を加工した奴だよ。さっき行ったら、もう出来てたんでな、受け取って来た。名前は『スカイブルー』だ』

「へ～……」
「何を言ったか全く分からなかったわ」
抜きながら説明し、キャシーは刀身を見て感嘆の声を洩らし、メルシアは全く分からなかったことを悔しく思っていた。

『お前達、風呂は済ませたのか？』
「あ、ううん。まだ。ずっと練習してたから」
「む……分からない……」
「なら、さっさと入れ」、と言って、ムラクモはベッドに寝転がった。キャシーは素直に返事をし、当然の様にメルシアの手を掴み浴場へと向かった。
「ちょ、キャシー、どうして私を引っ張っていくの？」
「お風呂でも練習するからに決まってるでしょ？　それに、誰かと一緒にお風呂入ったことって無いんだ、わたし」
「だから何よ？」
「まあまあ、良いじゃない。スキンシップだよ、スキンシップ」
楽しそうに手を引き、キャシーはメルシアを浴場まで連行していった。

「メルシア、肌綺麗だね？　どんなお手入れしてるの？」
「何もしないわよ。体のことなんて何も気にしてないから」
「いいなあ……」
「それで？　どうして広いお風呂の中で、並んで入っているのかしら？」

この宿のお風呂は、小部屋と大部屋で大きさは違うが、その差が激しい。小部屋では精々二人が同時に入るのが限界だが、大部屋では五人程は余裕で入ることが出来る。その広い風呂の中で、何故かキャシーはメルシアにピッタリくっついている。

今の質問はそれについてのことだが、

「え？　なんとなく」

キャシーはそう答えた。

「……そう」

「うん。さ、練習始めようか？」

「ええ」

それから二人はまた読唇術の練習に励んだが、

「ぅあ～……のぼせた」

キャシーがダウンしたことにより強制中断となった。

「はあ」

浴場にメルシアの溜息がやけに大きく響いた。

第九話・出来る者の感覚、出来ない者の感覚（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

第十話・キャロルの過去

終焉戦争、十年前世界各地で突如として起こった魔物の暴走を発端として始まった人と魔物の戦争。兵器を騎士共に総動員し、各地で壮絶な戦いが繰り広げられた。戦いは十日程で終わったが、その終わり方に疑問を持っている者は多数いる。世界貴族の者達は皆そうだ。何せ、始まった時と同じように突如魔物が大人しくなりそれぞれの住み処へと戻ったのだから、当たり前だろう。だが、戦いの傷痕は今尚痛々しく残っており、結果としてこの戦争は、＜終焉戦争＞と名付けられ歴史に刻まれたのは、まだ民の記憶に新しい。

現在、ムラクモ、キャシー、メルシアの三人はディロウアに向けて昨日ムラクモとメルシアが戦った街道を時々襲撃してくる魔物を倒していきながら歩いている。その途中、読唇術の練習をしていたキャシーが突然、昨日ムラクモに終焉戦争のことを話していないことを思い出し、説明したのが上記のことである。

その間も魔物は来たが、ノアが全て倒し収納した。

「簡単に言えばこんな感じ」

「ついでに少し付け加えるなら、最近は魔物の暴走が『人為的に起こされたモノではないか？』っていう仮説も立てられてるわ」

「え……そうなの？」

「あくまで仮説よ」

メルシアの言ったことは、まだまだほんの一部で囁かれているだけであり噂の域を出ないが、数人の耳には既に入っているだろう。事実として、メルシアはそのことを知っている。

「でも、そんなことが出来る人がいるとしたら、どうしてそんなことしたんだろう？」

「さあね」

ちなみにメルシアがいる理由は単に、「読唇術をマスターしないと気が済まない」と言う意地の様な物だが、諦めないことは大切なことだ。

「ただ……貴方に少し聞きたいのだけど、本当にそんな人がいるなら、貴方はどうする？」

少し後ろを歩いているムラクモに、メルシアは突然尋ね、キャシーもムラクモを見た。

『どうもしねえよ。興味も無い』

「え？」

「なんて言ったの？」

まだ少しの単語しか分からないメルシアは、キャシーからムラクモの答えを聞いて歩みを止め、

「――憎くないの？」

振り返りつつそう尋ねた。

（「最初は憎んだ。恨みもした。でもな……結局何が変わる訳でも

ない」）
「じゃあ、その人が実在していて、もし『目の前に現れたら』どうする？」
（「一発殴らせてくれたらそれでいいさ」）

練習を続けろ、と言ってムラクモはこの話を終わりにし、右手を左の袖に、左手を右の袖に入れて歩き始めた。

「……」
「どうしたの？」

その背をじっと見つめていたメルシアにキャシーは聞いたが、

「いいえ、何でもないわ。続けましょう」
「？　うん」

そう答え、メルシアも歩き始めた。その後をキャシーも追いかけ、引き続き読唇術の練習を始める。

「（レークナ）」
「『えーくや』？」
「あ、近い」
（そうか？）

その後半日掛けて、レークナとディロウアの中間地点である巨大橋に到着した一行だが、そこには人だかりが出来ており、足を止めることとなった。

「邪魔ね……」

「ムラクモが『斬ろうとするなよ』、だって」
「しないわよそんなこと（ちゃんと聞こえてたんだから）」

その会話が聞こえていたのか、旅の行商人の様なおじさんが三人に、ディロウアに行こうとしているのかを聞いてきた。その問いに、キャシーとメルシアは頷き、ムラクモは空を眺めていた。

（腹減った……）

そしてそんなことを考えていた。

「この人だかりはなに？」
「ああ、橋が壊れてるんだよ。何とかすれば通ることは出来るかも知れないけどね……危険過ぎるから誰も通ろうとしないらしい」
「まあ、そうだよね……」
「通ろうとする奴がいたら只の馬鹿よ。それで、ディロウアに行くなら、＜神の泉＞から＜コマナシ＞に行って迂回するしかないのかしら？」
「そうなるね。ただ、それにしても問題がある訳だが……って、せめて話は最後まで聞いてくれないかな？」

二人は、おじさんの言った、そうなるね、辺りで既に来た道を戻っており、後をムラクモもゆっくりと追っていた。

（「それで、あのおっさんが言ってた問題って何だ？」）
「これも終焉戦争と関係あることだけどね……戦争以降、神の泉は、『飲んだ者の体を癒す』という効果を失ってしまったの。なんでも、その『泉を護っている者が穢れたから』、らしいけど」
「その護っている者も魔物なんだけど、確固とした自我を持ってる

の……名前は＜ウーティ＞。討伐ランクはＡ～Ｓよ」
（穢れた、ねえ……そんで、自我を持ってるってことは、十年近く苦しんでるってことか？　俺だと耐えられねえな、それは）

文字列が出ないことを、ムラクモが理解したと判断したのか、二人はまた読唇術の練習を始めた。

それからまた半日ほど掛けて、三人はレークナ付近へと戻ってきたが、そこでまたも足を止めることになってしまった。

「『よな』？　て、キャシー？」

正確には、足を止めたのはキャシーだけだが、つられて二人も足を止めた。キャシーはメルシアの呼びかけにも応じず、ずっと街の出口を見ていた。そこには、鎧を着た騎士が五人程おり、道行く人に何かを聞いていた。

ボ～ッとしているキャシーの目の前でメルシアは手を振るが、それでも反応を示さず、今度はムラクモが頭の上に手をポンと置いた。

すると、

「はっ」

戻ってきた。

「どうかしたの？」
「あ、ううん。何でもない」
（「あの騎士達か？」）

キャシーが見ていたのは、あの騎士たちだろうと思い、ムラクモがそう聞くとキャシーは図星を突かれたことで何も言えなくなった。

「そこのお三方、少し聞きたいことがあるのだが、構わないだろうか？」

そんなキャシーを見ていると、五人の中から三人程がムラクモ達に近づき、先頭にいる男性騎士がそう聞いた。その問いにメルシアが首を縦に振り、それを確認すると男性騎士は、「この辺りで王女様を見ていないか」と聞いてきた。

「王女様？　ああ、スレイジア家の？」

「そうです。実は一昨日の夜、キャロル様が城を抜け出したので、一応聞いて回っているんですが……」

「一応って、どういうことかしら？　いなくなったのは王女なんでしょ？」

普通、一国の王女が城から姿を消す様なことが起きたなら、王はすぐに捜索を開始させ、騎士達は血眼になって探す筈だ。だが、騎士の言い方からしてそんな様子は無い。

「それは私がご説明したいのですが、よろしいですか？　隊長？」

「ん？　ああ、そうだな。頼む」

後ろに控えていた蒼髪の女性騎士が隊長に許可を取り、前に出て説明を始めた。

「あ」

「え？」

「っ」

その女性騎士を見た途端、キャシーは声を上げそれに気付いた騎士が見たが、キャシーは「しまった」と言うような顔をしてすぐにムラクモの背に隠れ顔だけを出した。

「何か？」

「いえ、気にしないで頂戴。それで、どういうことかしら？」

「あ、はい。まずは、キャロル様の過去をお話しすることになりますが、よろしいですか？」

頷いたムラクモとメルシアを見て女性騎士は、王女、キャロル＝ド＝スレイジアについて話始めた。

十年前のある日、キャロルは宝物庫に向かうと言った王について行くと言いだし、手を離さない様にと約束した上で共に宝物庫に向かった。宝物庫に向かった理由は、ある探し物をする為。到着したキャロルと王は共に中に入り、王は近辺の物に触れない様にと言い聞かせ探し物を始めたが、何分長い間放置されていただけに、どこに何があるのかは分からなくなっていた。宝物庫と言っても、そこにあるのは魔導書が殆どであり、金銀財宝があると言うわけでは無いが、仮にあったとしても魔導書に比べれば大した価値がある物では無くなる。それほど、スレイジア城に納められている魔導書は価値があり、同時に危険な物であった。

王が探し物をしているその間、暇になったキャロルは中の物を見物していたが、まだ幼い為何が何なのかを理解することは出来なかった。

それから暫くして、キャロルの背後に何かが落ちた音がし、驚きながら振り向くとそこには一冊の魔導書が落ちていた。その魔導書こそが、王の探していた物なのだが、何を探しているのかすら聞いていなかったキャロルにそんなことが分かる筈もなく、その魔導書に近づいた。見上げると、そこには丁度一冊分が入りそうな空きがあり、キャロルはなんとかしてそこに戻そうと思い、魔導書を拾う為屈んだ。

王はそこで別の所を探そうと、探していた本棚とは別の本棚を見たのだが、そこで娘が何かに触ろうとしているのを見た。

それを見た王は血相を変え娘の名を叫んだが、既に娘は魔導書に触れてしまっていた。

途端、魔導書から闇のマナが溢れ出し、キャロルを包み、王は慌てながらも光のマナを手に集め魔導書を払い、同時にキャロルは気絶した。

娘の一大事に慌てるなと言う方が無理だが、その時の王は余程慌てていたのだろう。愛娘に何度も呼びかけ、そのことに夢中になっていた所為で娘の中に入り込んだ闇のマナを見逃してしまった。

それから、キャロルは一週間ほど目を覚ますことは無く、王はその間自分を責め続け、王妃の慰めの言葉も耳に入らない状態となっ

てしまった。

「加えて、私たちも王女様のことが気がかりで、訓練にも身が入らなくなってしまいました」
「王女様の所為、みたいな言い方になってしまうが、事実でな。皆、王女様が大好きなんだ」

隊長の言葉に、女性騎士と後ろにいるもう一人の騎士は深く頷いた。

「それで、王女様はその後どうなったの？」
「目は覚ましましたが、魔導書のマナに触れたショックが大きかったのか、それまでの一切の記憶が消えてしまいました」
「……」

その言葉を聞き、メルシアは何も言えなくなり、キャシーは黙り込み、ムラクモの着物を強く握っていた。

「加えて、本来ならマナと髪や目の色に関係はありませんが、マナがあまりに強すぎたのか左目が黒くなってしまったのです。それが何か影響を与えた、と言う訳では無いのですが、これから何か起こるのでは無いかという懸念はあります」
「そう。それから、王女様はどう生活していたの？　両親の顔も、貴方達騎士のことも全て忘れて……待って、消えた？　忘れたのでは無くて？」

言っている途中で、今更ながらメルシアはそのことに疑問を抱い

た。

「そうです。文字通り、一切の記憶が消えてしまいました。貴女が言うように、王様と王妃様、私たちのこと、そして自分のことも……全て」

（少し俺と似てるな。違うのは記憶って点だが、その場合辛いのは忘れた方より忘れられた方）

「それから、王女様が自分達の娘であることを、お二方は教えました。王女様も、やはり相手がご両親だった為か、恐怖心などはあまり無かったのかも知れません」

これが以前言った、「キャロルにとって、王族であることは当たり前ではない」ということである。

それから、王と王妃は可能な限りキャロルを自由に生活させることにした。だからと言って、それまでが不自由だったと言う訳では無く、外出する際は二人も一緒だった。以前も言ったが、スレイジア家は最下位に属している貴族であるため、厳しい家庭環境と言う訳では無い。いや、例え上位に属していたとしてもスレイジア家は厳しくはなっていないだろう。

そんな両親の、新たな方針の下、キャロルは自由に生活を始めたが変わった点と言えば、見る物全てに興味を抱くようになったことだろう。他のことは殆ど変わっていなかった。世界のことや魔物のこと、剣術に興味を示し、中でも特に興味を示したのが外の世界のことであった。記憶が消える前にした遠出と言えば、ライドメイル大陸で行われるパーティ位であった為、一度も出ていないことと同義だった。

だが、やはり危険と言うことで街の外に出ることは出来なかった。
それを補うかの様に、剣術の練習に励み、騎士達の動きを真似て我流剣術を磨いていった。

「それから三ヶ月程が経過し、終焉戦争が始まりました。王国でも、甚大な被害が出てしまいましたが、王女様達は城内の結界に護られていたので、無事だったのです」

その後、キャロルは只護られるだけだったことに不甲斐なさを感じ自分の力で何かを護りたいと思うようになり、以前にも増して剣術に打ち込む様になった。

「それからの王女様の成長には、目を見張る物がありました。騎士相手に戦い負けたことは殆どありません」
「手加減をした、とかではなくて？」
「したつもりはありませんが、やはりどこかで抜いてしまっていた所はあったかも知れません」
（ん？）

女性騎士がそう言った時、ムラクモはキャシーの手に更に力が込められたのを感じた。

（まあ、いいか）

だが、あまり気にしないことにした。

「それで、何があったか知らないけど、王女様は一昨日城を抜け出したのね？」
「そうです。王女様が外の世界に強い憧れを持っておられることは皆が知っていたので、形だけでも捜索をするように、と王様から命じられているのです」
（だから、一応か）
「成る程ね……それじゃあ、見つけたら知らせた方が良いかしら？」
「そうですね。念の為、王女様の特徴を教えておきます」
腰元まである銀髪に青い右目と黒い左目。身長は百四十？程、そして腰には宝刀であるシュヴァイスを提げている。
それが、王女・キャロル＝ド＝スレイジアの特徴だった。

騎士達と別れた三人は、改めて中間地点である神の泉に向けて出発した。
途中、両親と城の者達の思いを知ったキャシーは、皆に感謝した。
（やっぱり親なんだ……ありがとう、お父さん、お母さん。わたし、世界の隅々まで行ってくるよ）
そして、そう決意した。
「さて！　練習、頑張って行くよ！　メルシア！」

「いきなり何よ？　まあ、いいけど」

まずは読唇術をメルシアに教えることを頑張ろうと決め、気合いを入れて言うキャシーに溜息を付きながらも、メルシアは練習を始めた。

後ろを歩きながら、ムラクモは泉を護っている魔物のことが気になっていた。

（穢れたってことは、正気を失ったりしてんのかな？　倒して元に戻ると良いが、他にも魔物がいるだろうし、結構面倒な戦いになるかもな……旅に出て早々ワイバーンに遭遇したり、金髪と戦ったり、メルシアに喧嘩売られたり……こんだけ色々あって、その泉だけ何も起きないなんてことはないよなあ）

ムラクモは空を眺めながら溜息を付き、また視線を前の二人に戻した。

「『ひゃこふ』？」

そして、また吹き出しそうになった。

翌日。

その日は朝から雨が降っていた。昨日まではそんな気配すら無く、突然の雨だった為、キャシーとメルシアはムラクモの両サイドにくっつき、三人でノアの下に入っている。

「貴方のお母さん……不思議な力を持っていたのね？」
『そうだな』
「あ、『そう』は分かった」
「お、すごい」
「ん」

ムラクモは、キャシーにする時と同じようにそっとメルシアの頭を撫でた。

（いいなあ）

キャシーはそう思っているが、メルシアは何か不満なのか顰め面をしていた。そして、ムラクモに少し屈む様に言い、耳元で

「もっと乱暴にしてくれない？」
（乱暴？）

それを聞き、姿勢を戻したムラクモはメルシアの頭をがっちり掴みギリギリと力を入れた。

「ちょ、何してるの！　ムラクモ！」
『いや、こいつが乱暴にしてくれって言うから』

それを見たキャシーはそう言ったが、ムラクモは力を緩めずにメルシアの頭を掴んでいた。

「ああ！　もっとぉ！」

掴まれているメルシアは、いやがる所か喜んでおり、キャシーはどういう反応をすれば良いのか分からないようで、言葉を失ってい

た。

『キャシー、世の中には色んな奴がいるんだよ』

「うん……そうみたいだね」

この日、キャシーは新たな知識を得た。

「ああん！　もっとお！」

（なんか、普段のお袋と手紙のお袋みたいだな……）

用は普段との違いがありすぎる、ということである。

第十話・キャロルの過去（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9535z/

語ることの出来ない剣士

2012年1月6日13時17分発行